東京立正女子短期大学

論　　叢

第　二　巻

―目　　次―

巻頭のことば	岩本経丸	1
教育統計からみた女子青年の進路と女子教育の問題点	神辺靖光	2
戦後の教養放送	庄司寿完	22
Typewriting 教育法の研究　その一 ―Typewriter の開発と Universal Keyboad の問題―	井口美登利	33
文型練習における問題点	田島富美江	27
発音教育についての一考察	田所南美子	24
対人関係とテレビ視聴パターンに関する一研究 ―国際基督教大学大学院提出・教育学修士論文―	カズコ・ムーア	8
ヘンリイ・ジェームズの「アメリカ人」について	近藤久美子	1

昭和四十三年

論叢 第二巻を送ることば

学監　岩本経丸

英米語科の中に、秘書、教職、第一、第二教養の四コースを含む定員一〇〇名の単科短期大学であっても、その設置から第一回生を送り出すまでの二ヶ年の歳月は十年にも匹敵するかと思われた。幸に、設置基準をはるかに上まわって完成を見たことは、学生をも含めて大学関係者一同の喜ぶところであろう。さらに、第一回生は意外によい質の職場に一〇〇％の就職ができたし、就職を志ざさない者も皆それぞれ望むところにおちついたことは、第二の喜びだと言えよう。

しかし、このささやかな短期大学の設置の仕事には思いがけない困難があった。すなわち、一教授の交通事故、三教授の長期入院、一助教授のベネット大学への長期出講、二職員の入院、一講師の英国留学等による教務の運営は楽ではなかった。これも各科の主任教授や中堅少壮の助教授、専任講師、客員教授・講師の努力や、開拓者の意気にもゆる学生諸子の勉励によって切り抜け得たことは感謝にたえない。この「論叢」の第二巻は、このような中から生まれ出た。関係者の苦労に敬意を表しつつ、ささやかなこの「論叢」第二巻を世に送る。（昭、四三、十二、一）

戦後の教養放送

庄司寿完

戦後の教養放送の特長

周知のように、太平洋戦争終結後の数年間、わが国の放送事業は、GHQの民間情報教育局（CIE）の強力な監督と指導下におかれた。CIEは、占領政策の目標実現のために、いわゆるキャンペイン・シートを作成して、NHKにお下げ渡ししていた。NHKの放送番組は、必ずこのキャンペイン・シートに基づいて、企画・編成されなければならないものであった。ところで、キャンペインとは何か。キャンペイン（Champaign）という言葉を、辞典で見ると「攻城野戦。組織的闘争。運動」とある。もともと軍事用語で敵を攻撃することから転じて、ある主張を浸透させるための運動を意味しているのである。それゆえキャンペイン・シートは、GHQの占領目的——軍国主義的思想の追放、言論、思想、宗教の自由回復と基本的人権の確立、日本経済の回復・維持など——を基本にして、国連、農地改革、食糧増産、公衆衛生、証券民主化など二十五項目にわたっていた。それは情報・教養番組とは限らないもので、公共放送たるNHKのすべての番組の筋金だといわれていたが、とくに「教養番組」は、それなくしては考えられないほどの意義と重要性とを持つものといわれた。

昭和二十五年ごろになって、日米間で講和条約が問題になりかけ、また、国会で放送法が審議されたりすると、その社会情勢を反映して、キャンペイン・シートは、目的と内容を変えてきた。NHKの自主的な作成にまかされたからである。「占領政策推進」のためのキャンペインは「公共の福祉」のためとかわり、占領軍の手からではなくて、わが司法、行政の各中央機関、公共企業体、公益団体などから直接NHKに提供される。このため、同年三月からNHK社会課にキャンペイン班ができ、班長の長谷耕作氏（現広報協会事務局長）が中心となり、自主的キャンペイン・シートを作成、東京の編成各部局はもちろん、全国各放送局に配布して、番組編成のバック・ボーンとしたのである。その後、民放の開設に伴い、キャンペインも性格を変え、多様化した。NHKの公共性を明確に打出そうとする「総合キャンペイン」民放の在野色ゆたかなキャンペインの発足・展開など注目すべきことが多い。「特集番組」「NHK歳末助け合い」公明選挙、暴力追放、交通事故防止、ポリオ撲滅、公害など、放送キャペインの果した役割は決してすくなくない。戦後の教養放送の第一の特長は、つねにこのキャンペイン資料を編成のバック・ボーンとしていることであろう。

第二に、聴取対象を特に明確に打ち出して、特定対象の番組がふえた

ことである。学校放送はいうまでもないが、青少年番組、婦人番組、農事番組などが、それぞれのワクの中で分化して、キメの細かい企画・演出をするようになったことである、

第三に、これまでの教養番組といえば、教育的な番組の一部をのぞくと、検閲制度による迎合番組が多く、上意下達的な修養・信念のお話が多く、官報的な公示機関の傾向が強かった。形式も主として講演番組であった。それがCIEの指示で、いろいろの形式の番組があらわれたことである。講演形式は戦後の放送用語で「トーク」といわれるが、それは単調で飽かれやすいというので敬遠され、座談会、討論会、録音構成などが重視された。はては、それまでのわが国の放送人にとって考えられもしなかった、教養的インフォメーションを盛りこんだ「インフォメーション・ドラマ」やショー形式のものまで制作するように、指導された。否応いわさぬサゼッションであるから、米国の台本をもとにして当方の台本をつくり、それらの異端とおもわれた番組を作ったのである。CIEの強制で導入されたblanket coverageやquarter systemなど番組の形式面の改革とともに、内容面の改革として、これらの番組は、音楽・演芸などの新傾向の番組とともに、NHKの番組に、多彩と回生を与えたことは認めなければならない。そこで三つの特長について、すこし具体的に書いてみよう。

キャンペインと放送

キャンペインのテーマに直接結びついて、これを消化する代表的な番組例は、昭和二十三年一月から始まった「インフォメーション・アワー」をあげることができる。毎日、午後八時から三〇分間、すべての演芸や音楽番組をはずして、社会番組で押していくことになった、いうまでもないが、この時間帯は、そのころから使われはじめた言葉でいえばゴールデン・アワー(聴取好適時間)で、聴取率のいちばん高い時刻である。その時間帯を、このようなキャンペイン・シートから直接とり上げてきた、啓蒙・啓発の堅い番組でうめることは、放送界の常識からいっても賛成できることではなかった、NHKは途方にくれたが、CIEは、民主主義思想の啓発のためと称して、あえてこの冒険に踏みきらせた。「インフォメーション・アワー」の曜日と番組の名称は、次のとおりである。

月　新しい農村
火　労働の時間
水　社会の窓
木　産業の夕
金　ローカル・ショー
土　家庭の話題
日　時の動き

「新しい農村」は、新時代の農民として必要な知識や情報、例えば農地改革、農業協同組合、嫁としゅうと、次三男問題などのテーマを、主として対談で構成したもの。

「労働の時間」は、最初短いドラマによって問題を提起し、そのテーマをめぐって、ひとりの講師とひとりの青年の質疑応答の形式。テーマは労働者の権利・義務、労働組合の在り方など。この番組の企画には、CIEからだけでなく、GHQ政治局労働課からも反共の線を打出すように強い示唆があったようである。

「社会の窓」いろいろのキャンペイン項目を消化するための番組であった。テーマによって、マイクを持って関係現場に行き、関係者、一般人、当局の意見を収録して、音楽や解説をつけ、多角的に問題を追及してゆく形式が多かった。

「産業の夕」これは二十一年八月ごろから放送していた、キャンペイン番組「炭坑に送る夕」の続編というべきものだが、対象も題材も広くなっている。一般の聴取者に、産業と国民生活の関連を知らせ、経済復興への協力を促す目的のもの。ドラマ、録音、はなやかな音楽、司会アナウンサーの絶叫がいまも耳底に残るアメリカ調の強い番組であった。

「ローカル・ショー」は名のとおり各局のローカル番組で、「コミュニテイ・ショー」ともいわれた。各地の実情に即した、地域的社会問題をとりあげ、劇形式、現地録音、それに土地によって俚謡・民謡を多くとり入れて、できるだけやわらかい感じのものを作ろうと各局苦心した。「ローカル・ショー」選奨など、コンクールをやったことが、地方局の制作技術を向上させるのに役立った。

「家庭の話題」はじめ解説者が市民生活に関連のある問題をわかりやすく話しかけ調で説明するかたちであったが、単調なので、ホーム・ドラマに解説を入れたり、専門家と解説者との対談にしたりした。

「時の動き」刻々におこる社会事象、政治的事件を、いろいろの角度からとらえ、やさしく解説するもの。あらゆるラジオ的演出形式が駆使された。だいたい四つのテーマがえらばれ、それぞれ、寸劇、現場録音、対談など豊富な形式、アナウンサーも二人で、交互に入れかわり立ち代り、軽い音楽を入れスピード感を出して効果を上げようとした。

このような番組のほか、「街頭録音」「放送討論会」はもちろんのこと、「朝の訪問」やあとで触れる「婦人の時間」「農事番組」さては、クイズ番組の「話の泉」「二十の扉」まで、キャンペイン番組としてあつかわれた。

キャンペイン・テーマが、どのくらい番組にとりあげられたか、昭和二十六年中の実施数について前記の長谷氏が、報告しているのを見ると次のようになっている。

1　東京（ローカルを含む）

放送総回数　一一、五五四

一か月平均　九六三

右のうち種類別（二二種類）に比較的放送回数の多いのは、公衆

衛生の一、八八四回をトップに、公共安全、経済安定、農業改良普及、社会福祉、国連の活動の順、但し一、二位はステーション・ブレークが半数を占めている。

2　地方各局（ローカル）

放送総回数　一一〇、八八二

一か月平均　九、二四〇

右のうち放送回数の多い種類は東京と同じく公衆衛生が一四、八四八回、以下農業改良普及、公共安公、経済安定、社会福祉、食糧の増産と供出の順である。

3　テーマ別放送回数

テーマ数　一、三〇一項目

全放送回数　一二二、四三六

一項目当り　九四

個々のテーマ中、放送回数の目立って多いのは主として農事、衛生関係で、一テーマで五百回以上も放送されたのが年間二二項目あるが、最高は「地方選挙の強調点」で、二六年四月の僅か一か月間に全国で一、二一九回も放送されている。

婦人・農事番組の躍進

第二に、聴取対象を明確に打ち出して、特定対象の番組がふえたことであるが、学校放送や語学講座のようなものは、戦前からの番組であるから、ここでは触れない。とくに、対象意識を強調して、編成・演出の面で多角的な総合番組として躍進した、婦人番組と農事番組とをあげよう。

婦人番組の中心になるのは、昭和二十年十月からはじまった「婦人の時間」である。それは、ニュース、話、対談、座談会、メモ、ドラマ、音楽など一時間にわたる総合番組である。内容はおよそ次の三つにわかれる。

1　政治、経済、社会、文化の問題を扱う民主化教育としての番組

2　日常生活に直接役立つ実用番組

3　一般教養として、婦人の慰安と激励になる、慰安としての番組

このうち、1の項目に重点がおかれたことはもちろんで、「婦人の時間」の目標は、第一に民主主義思想の啓発にあった。次の重点は、婦人参政権獲得初の二十一年四月の選挙の日を目標にした、選挙キャンペインであった。

「明日の食糧。あなたはなにを食べていますか、今の日本でもっとも大切なものは食糧です。たべものです。」それは昭和二十二年の暮からはじまった「明日の食糧」という番組の冒頭のよびかけである。「あなたはどうして食べていますか」これは、その前年五月に発足した「街頭録音」の第一回の題目であった。このような深刻な呼びかけや露骨な設問がくり返されるほど、終戦直後の数年間、わが国の食糧難は深刻であった。ヤミ横行、米よこせ人民大会など、食糧確保がいかに大問題であ

るかを語っている。食糧増産が、荒廃の祖国を立ち直らせる至上命令ともいうべき、緊急な事柄であったのである。

ここに農事放送が、この時間に躍進しなければならない大きな要因があった。CIEはNHKにすすめて、アメリカの実例にならって、「農事番組担当者」(R・F・D=(Radio Farm Director)の全国組織を作らせ、東京の農事課を強化して、その中核とした。これが完成したのは二十四年四月であるが、番組の構成・形式のことはこれまでしばしば述べているので、農事番組の骨組みとなった、RFD三か年計画を紹介することにとどめよう。

第一年(昭和二十四年度)

イ、ローカル農事放送委員会の設置

ロ、各管内の農作物、農家生活の実態調査

ハ、RFD連絡網の整備

ニ、アメリカRFDとNHK・RFDとの通信交換

第二年(昭和二十五年度)

イ、世界主要国の農業立地と農実生活の実態調査

ロ、各管内農村文化の実態調査

ハ、全国RFD会議

第三年(昭和二十六年度)

イ、各管内水産物および漁村生活実態調査

ロ、各管内林産物および山林生活実態調査

ハ、全国RFD会議

ドキュメンタリ・ードラマ

——(今日の歩み)——

昭和二十四年の夏、CIEラジオ課のバートランディアス氏から、一時間もののドキュメンタリー番組が米国で成功したから、NHKでもやったらどうか、という示唆があった。社会番組のプランナーを前にして、B氏は、その評判をとったという番組の分厚い台本をドサリとおいて、録音もあるから聞かせようということになった。

それからB氏の講義がはじまり、「——社会の重要な問題をとりあげ、深く掘り下げて、これをドラマの形式にまとめて、強烈なインフォメーションとする。内容はすべて事実に基づかねばならない。一時間を通し一つのテーマを扱う。映画によくある、数個の挿話を集めてやる事は許されない。企画者の意見が入ってはいけない等々——がアメリカのやり方である。」(放送文化、昭和二十五年二月号四〇頁)

三〇分のインフォメーション番組ですでに手を焼いているのに、このうえ一時間のお説教番組なんて、とんでもない。といって、CIEの示唆は汗の如しで、引込むはずのものではない。とにかく、最初はやり易いテーマにすることにして、そのころ施行された犯罪者予防厚生法をとりあげ、不良青少年の問題を扱うことにきめ、資料集めにとりかかった。

苦労の揚句、台本は二か月目にでき上り、一〇月三〇日放送にこぎつけた。これが、「今日の歩み」という、最初のドキュメンタリー・ドラマであった。月一本の予定であったが、資料の蒐集、演出の問題にいろいろ困難がかさなって、実際に放送になったものをあげると、次のようになる。

第一回　「君達は何が欲しいか」
——犯罪少年の予防と保護——
一〇月三〇日　後八、三〇
脚本　筒井敬介　演出　山口　淳

第二回　「そうだそれこそ僕達のもの」
——青少年のスポーツ
一二月一八日　後一、〇〇
脚本　伊藤海彦　演出　善田英夫

第三回　「金色の革命」
——租税の歴史——
二五年一月三〇日　後七、三〇
脚本　筒井敬介　演出　伊藤信雄

第四回　「葦泣かず」
——人権擁護——
二月二八日　後八、〇〇
脚本　甲田長正　演出　伊藤信雄

第五回　「ある心の記録」
——社会教育の問題——
四月二七日　後八、〇〇
脚本　新井太郎　演出　永山　弘

第六回　「一三二の椅子」
——選挙の問題——
六月三日　後八、〇〇
脚本　中山　侑　演出　近江浩一

第七回　「私一人で沢山だ」
——肺結核の問題——
八月二七日　後八、〇〇
脚本　西沢　実　演出　伊藤信雄

第八回　「二百八十万の人々」
——公　務　員——
脚本　中山　侑　演出　藻寄準一

「今日の歩み」は番組編成の常識からすれば、ずいぶん大胆な企画であったが、聴取者からの反響は、かなり良いものが多かった。番組の反響のことをいえば、第四回の「葦泣かず」は、人権問題をとりあげたものであるが、要望が多く、パンフレットを作って配布したが、申込数は実に一五万に上った。その次の「ある心の記録」は、社会教育の一般的な考え方から、公民館の問題におよんだが、この放送があってから、全

国的に設置運動がおこり、公民館が急増したといわれた。

熱狂的といってよいほど、もっとも反響のあったものは、「私一人で沢山だ」で、社会問題としての肺結核を取扱ったものだが、「珠玉をちりばめたようなインフォメーション」というのが、部内考査の批評であったし、療養所から感激の投書がたくさん寄せられた。

文書番号・A777

前項の「今日の歩み」が誕生する話のくだりで、インフォメーション番組の担当者の前に、分厚い放送台本が置かれたと書いたが、それがアメリカで成功したという、この妙な名前の番組のスクリプトであった。原作と演出は、有名な作家であり、演出家でもあるノーマン・コーウィンで、一時間もののインフォメーション・ドラマ、テーマは世界人権宣言を扱ったものである。世界人権宣言というのは、一九四八年一二月一〇日、パリで開かれた国際連合第三回総会で採決された「全世界の人民及び民族が達成すべき共通の規範」として、人権、性別、言語、宗教、政治、財産、地位、出国、生籍のいかんを問わず、人権に対するあらゆる差別待遇を廃することを宣言したものである。

「文書番号・A—777」というのは、国際連合第三次総会議事録にある正式原文の整理番号なのである。同名の、この“Document A/777”は、国連放送部の企画・制作によるもので、いま述べたようにノーマン・コーウィンの作ならびに演出で、アメリカの四大ネット・ワークの一つMBSの系統で全米に放送されたものである。

このような堅いテーマのドラマで、よくも持たせた(原作は一時間半)と感心するが、台本の終りにいって、謎がいくぶんとけるような気がする。

配役のなかに映画でおなじみの、シャルル・ボワイエ、ロナルド・コールマン、ジョン・クロフォード、チャールス・ロートン、ローレンス・オリヴィエ、エドワード・G・ロビンソンなどが顔をそろえている。これなら聴取者の興味をつなぐ要素は充分あるわけである。

そのうえ、聞いてみるとこの番組をつくるために、できるだけの資料を集め、精密な実地調査をやり、プランナーも大勢の助手を使ったそうである。それではいい番組ができるわけである。B氏の話を聞いていると、この放送台本は、ドキュメンタリー・ドラマのバイブルのようなものであるが、それだけの手間と費用をかければ、当然と思えるのである。

この「文書番号・A777」は、「今日の歩み」の枠外放送として、二五年一二月一〇日の「世界人権宣言記念日」の午後八時から、企画・重田定邦、演出山口淳、脚色藻寄準一、作曲指揮・服部正、出演・夏川静江、加藤精一、東野英治郎、中村伸郎、芥川比呂志、北沢彪の諸氏等のスタッフにより全国放送した。

結び

教養番組は、「学校放送」のような教育的番組と「語学講座」のような補習教育的なものと、これまで述べてきたような社会教育的なものとに、二大別することができる。そして戦後の特徴は、その社会教育番組の多彩化と活発化とにあることはあきらかである。

戦後いちはやくGHQは、日本政府に対し「政治、信教ならびに民権の自由制限撤廃に関する覚書」(昭和二〇、一〇、四)を指令したが、これはCIEの放送指導の基礎になった。戦前や戦時中には、考えられもしなかった政府の政策批評が堂々と番組にうたわれることになり、これまでの講演番組の乾燥性を救うことになった。加えて前記のように、番組の形式や演出の面にアメリカ式のテクニックが入ってきて、多角的な構成が流行となった。いわゆる「トークとミュージック」で、話のあとの息抜きの音楽が、定型となってきた。また、現地録音、描写、解説、評論などの配列、時間の割りふりは、いかに聴かせるかの工夫であった。しかし、時に翻訳臭がつよく、むき出しの説得と性急な啓発が、聴取者の反感を招いた番組も、たしかにあった。ことに「インフォメーション・アワー」の編成には、当初からいろいろの批判があった。けれども総括的に見るならば、これらの教養番組は、放送史のうえに二つの意義を持っているといわなければならない。ひとつは「ローカル・ショー」などの強制執行と選奨によって、地方局の番組制作技術を、この時期において飛躍的に向上させたことである。さらにICEには、占領政策推進という目的と制約があったにせよ、放送法によって志向されるまえに、真剣に「公共の福祉」を考えることを、わが公共放送人に教えたのは、アメリカの商業放送出身者であったということである。

参考文献

日本に与ふる放送準則(一九四五、九、二三、GHQ参謀副官ハロルド・フェア中佐)

東京放送の現状に対する批判と要望(一九四五、一〇、二五、GHQ放送主任官ロス大尉)

NHK編「日本放送史」

NHK広報室編「放送文化」

南江治郎訳著「文書番号A—777」

日本放送出版協会刊「放送研究入門」

Typewriting 教育法の研究 その1

―― Typewriter の開発と Universal Keyboard の問題 ――

井 口 美 登 利

0. ま え が き

1. Typewriter の開発

1. 1. Henry Mill の発明

1. 2. William A. Burt の機械

1. 3. Christopher L. Sholes の Typewriter

1. 4. Universal Keyboard の採用

2. Universal Keyboard の問題

2. 1. Universal Keyboard の欠点

2. 2. Simplified Keyboard の提唱

2. 3. New Keyboard の後退

2. 4. Universal Keyboard の部分的改良

2. 5. Universal Keyboard と Typewriting 教育

0. まえがき

主題である "Typewriting 教育法" の問題について，はじめに，その対象と目的とを 明らかにしておきたい．

1. ここに Typewriting というのは 英文（欧文を含む．以下同じ．）Typewriter を使用する英文の Typewriting を主とし，邦文 Typewriter を使用する "漢文仮名交り文" 表記による日本文の Typewriting は これを含まない．
   英文 Typewriter と類似の構造および機能をもつ カナ Typewriter を使用する "カナモジ" 表記による日本文の Typewriting，および，英文 Typewriter を使用する "Romaji" 表記による日本文の Typewriting については，自国語を補助的な手段で表現するという問題を除いて，多くの部分については 対象となり得る．
   Teletype，Telex のような印字式加入電信，あるいは Monotype などのように，その構造および操作が英文 Typewriter と類似するものについては，Communication の Channel と Media の問題を除き，すくなくとも その教育法については 対象となる．

2. 英文 Typewriting 教育においては，その語彙・文法を異にする 母国語以外の外国語を用いて表現するという問題を 必然的に 包含する．従って その面については，広く外国語教育の全般と不可分の関係を持ってくるのは 当然であるが，たしかに語学力の問題は 我が国における Typewriting 教育の根本的な障害のひとつである．
   およそ，内容についての充分な理解に欠けていれば，その適切な構成と表現の困難であることは Handwriting にしても Typewriting にしても 同様であり，従ってこの制約が Typewriting 教育のいわゆる Production Practice の段階で 直面しなければならない重大な問題であることは 容易に理解できよう．さらに それ以前に，Keyboard の Mastering にはじまる Technic Study ないしは Speed Typewriting の段階においても，こうした事情を充分に考慮した指導を行うことが 必要となってくるのである．
   ここに，日本における Typewriting 教育の特殊性に対応した独自の教育法の確立を 必要とする所以がある．
3. 一般に 教育の場にあっては，Theory と Practice の両輪が 適切かつ効果的に かみ合わされねばならないものと考えるが，Typewriting 教育については 特に 両者の緊密な連繋が不可欠である．
   教育および教育法に関する Theory 探求の根底となるものは，言うまでもなく，その Philosophy であり，Practice の計画と運営の基盤となるものは Physical な要素をふ

くんでの Psychology であろう.

本稿は 我が国の Typewriting 教育, 特に その教育法に関する Theory と Practice の問題を, Philosophy および Psychology の源に遡りつつ 考察して行くことを 主要な目的とする.

1. Typewriter の開発

1. 1. Henry Mill の発明

Typewriter の発明は, すくなくとも, これを 1714 年にまで遡ることができる. すなわち, この年の 1 月17日, England の Anne 女王 (1665—1714) は "字を書く機械" に対する Patent を 申請者・Henry Mill に与えているのである.

Gutenberg (Johann, 1394/99—1486) に始まる活字印刷術の発明とその実用化は, 単なる技術上の成果に止らず, 広く知識の普及という大きな問題に対して輝かしい功績を残したのであるが, 彼が Johannes Fust と共に, いわゆる 42行本聖書の組版に着手したのは1452年のことである. 活字印刷による 最初の辞書 Catholicon の刊行は 1460年であり, これは宗教の制約を離れた 世俗的な出版事業の端緒として 注目されるが, 同時に, その内容に端的に象徴されるように, 学問と知識の普及という将来の方向が示されている事実も まこと 興味深いと云わねばなるまい.

その後 250 余年, すなわち 15 世紀後半から 18世紀初頭にかけての, 西欧を中心とする 政治・経済・科学・技術の発達は目覚しく, ここに近代文化の形成が進められたことは多言を要しない. そして, こうした社会的および文化的背景のもとに, いわば 活字印刷術の個人化ともいうべき, Typewriting を生みだす素地があったのである.

1. 2. William A. Burt の機械

America における最初の Patent が William Austin Burt に与えられたのは, Mill よりもさらに 1 世紀以上おくれた1829年のことであった. Michigan 州 Mount Vernon に住む Burt が自らの "字を書く機械" の開発を志した動機は, 文書作成ないしは文書処理の能率向上にあったと伝えられる. 従って, すくなくとも此処には 必要は発明の母 という関係が存在していたわけである. しかしながら, その独創的な Idea にもかかわらず 彼の機械にはその実用化を阻む, ひとつの致命的な欠点があった. それは, この機械で字を書くには ペンで字を書くよりも いささか多くの時間を要したということである.

今日, 我国における邦文 Typewriter の普及が, 一定の限度に止まっているのは, "漢字仮名交じり文" という国語表記上の制約から 多数の活字を備えた機械の複雑な操作を必要とすることに原因があるのは勿論であろうが, なによりも, Typing の Speed が Handwriting

に比して大差があり，熟練を以てしても　到底補い得ないということにある現状を想起させずにはおかない．

1．3．　Christopher L. Sholes の Typewriter

Burt に続いて，多くの発明家・技術者ないしは好事家が“字を書く機械”の改良と　その実用化の問題に挑戦したが，いずれも部分的な成功をおさめたに止り，信頼性・操作の簡便性，そしてなによりも，ペン書きをしのぐ速度の問題を克服することはできなかった．

最初の実用化された機械，すなわち，前述の問題をある程度解決して，企業化された機械の端緒をひらいた Christopher L. Sholes は，Burt から数えて実に52番目の挑戦者にあたっている．

Wisconsin 州 Milwaukee の人 Sholes は，当時　その地の税関吏・郵便局長を勤めたが趣味家としても知られ，この問題に関心を抱いたのは，彼が48才の時であった．たまたま，John Pratt の考案にかかる“字を書く機械”の記事を読んだ彼は，かねてより自分の手がけていた“Page Numbering Machine”と，その構造が類似しているのに気がつき，友人両名との協力のもとに数字に加えて文字をも自由にうてる機械を完成させた．さらに改良を加えて実用化の確信をかため，出資者として参加した James Densmore の努力もあって，合衆国政府より二つの Patent を獲得したのであるが，この時，はじめて“Typewriting”という名称が用いられている．その日付は　1868年7月23日および7月4日であり，この年があたかも我国の明治元年にあたっていることは，まことに興味深い．従って，近代 Typewriter の歴史は，ようやくここに百年を閲したことになるのである．

図　1

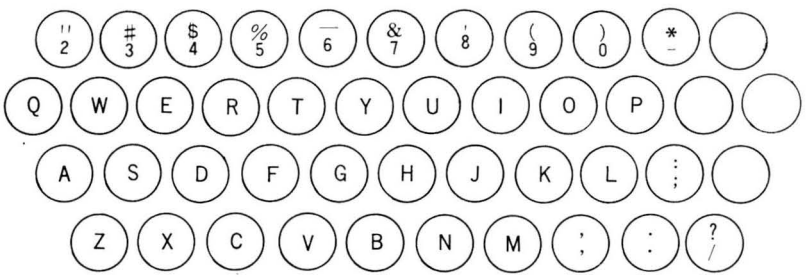


図　2

English (British Empire)

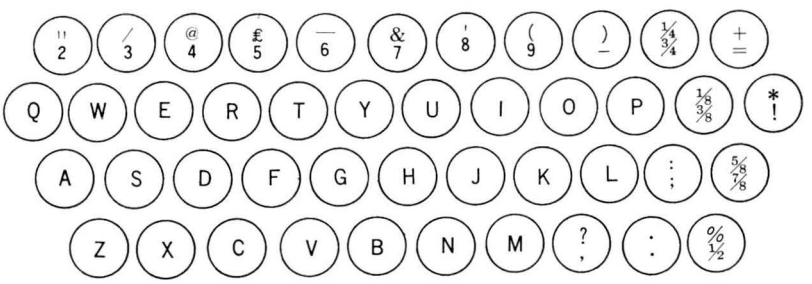


図 3

American

(U.S.A./ Canada)

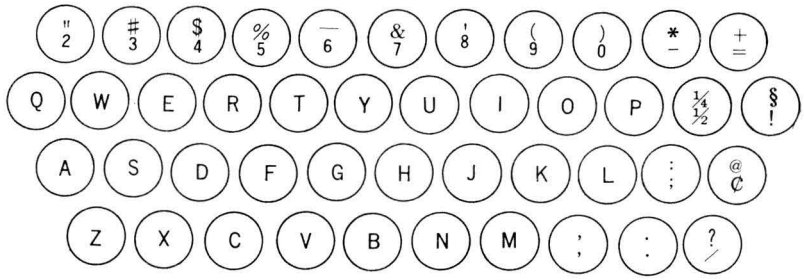


図 4

French

(France/ Belgique)

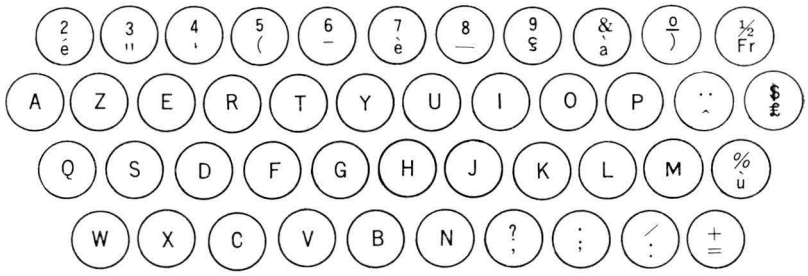


図 5

Spanish

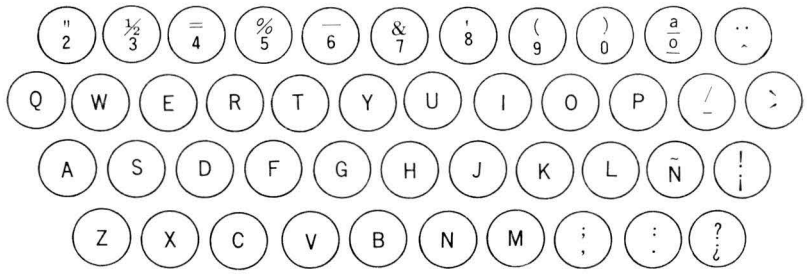


図 6

German

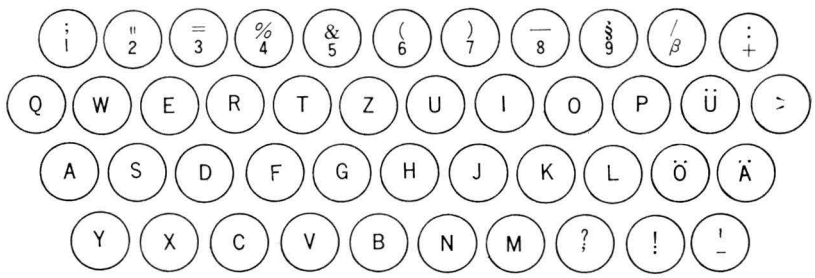


図 7

Italian

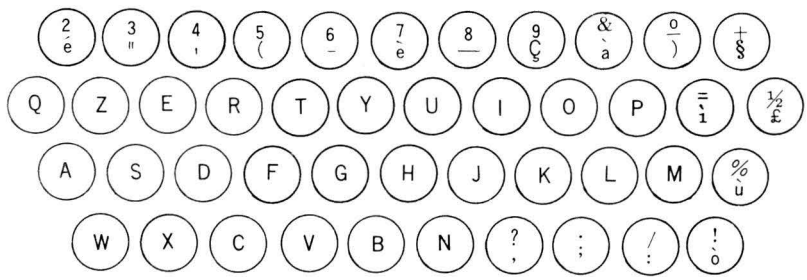
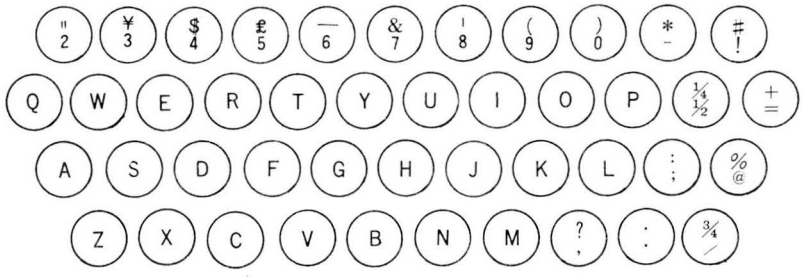


図 8

English

(Japan)



1. 4. Universal Keyboard の採用

今日 世界中で使用されている欧文 Typewriter の Keyboard の基本的な配列は 図1のものであって，通常 Universal Keyboard と呼ばれている．もとより，Russian や Greek あるいはカナ文字のように，その字母を異にするものはこの限りではないが，Roma 字を使用する English, American, French, Spanish, German, Italian 等の配列も，各国語の特性に対応するための 若干の変更を除いては 図—2，3，4，5，6，7，8 に示すようにほとんど同一である．

現在使用されている Typewriter の Key の数は42～48であり，これは Make, Model によって異同がある．周知のように，ひとつの Key には ふたつの Letter, Figure, あるいは Sign が組み合せてあり，これを Shift Key により切り換えて印字する．

A～Z までの Alphabet は，原則として，Capital と Small Letter の組み合せとなっているから，Key Top の表示は便宜上 Capital を用いている．

ここに掲げたのは 44-Key を備えた Hermes 3000／Media 3／Standard 8 Typewriter (Swiss, Paillard 社) の提供する Keyboard の一部であるが，全体としては，38国語に対する 116 種類の配列がある．その中で，Roma 字を使用しないものは Bulgarian, Greco-latin, Greek, Hebrew, Japanese (Kanamoji), Serbian, Ukrainian, Russian の 8 国語に対する 8 種類の Keyboard である．また，Roma 字を使用するが，全く Universal Keyboard によらないものは，Portuguese と Turkish の 2 国語に対する 2 種類の Keyboard のみである．図 9，10にその例を示しておいた．

図 9

Portuguese

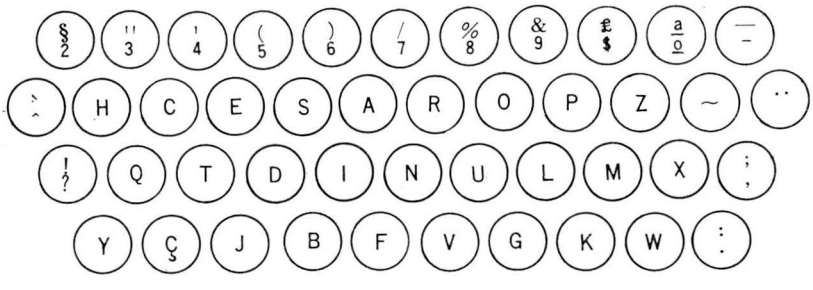
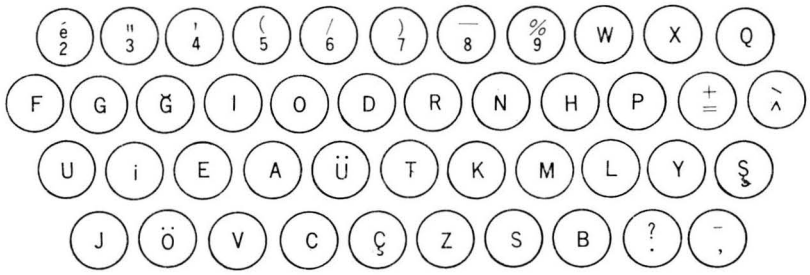


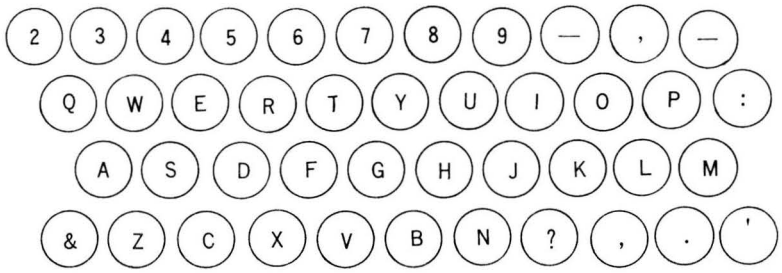
図 10

Turkish



こうした配列の祖型を作ったのは同じく Sholes と Densmore であった．印刷技術にも精通していた両人は，最初 印刷所における活字箱の配列を基礎として Keyboard の配列を定めたが，当時の機械の構造上の問題もあって，1872年，すなわち，1号機の製作後5年目に図11 のように改めている．

図 11



この Keyboard は 43 の Key および Space Key からなっている．当時の Typewriter は A—Z までは Capital のみで，Small Letter をうつことはできなかった．

今日のように Small Letter をも うつことができるようになったのは1878年の Remington Model 4 以後に属する．

図1 と比較すれば この Keyboard が現在のいわゆる Universal Keyboard と殆んど一致していることは容易に指摘できるのである．逆にいえば，Mechanism の著しい進歩と改良にもかかわらず Keyboard の配列のみは，90余年にわたって目立った変化を見せていないことになるが，このことは，必ずしも Sholes=Densmore の配列の優秀性を示すものではない．すでに 1872年の改定の時にあたっても，Sholes は，自らの第1号機以来の配列にこだわっており，“従来の配列を忘れて，新規の配列を覚えるためには，非常な困難を伴う”という苦情をもらしているのである．はやくも 1860年代の後半，Alexander Davidson が自らの理論による新配列を提案しているが，広い支持を受けることなく挫折し，それ以後1940年代における August Dvorak に至るまでの数々の新配列の理論が．その多くの利点にもかかわらず，いずれも失敗に終っているのは，主として，旧配列により修得した自己の技術に既得権意識を持つ Userの抵抗と，それに迎合する Maker の Commercialism に帰せられる．たとえば1960年代に開発された IBM 社の Selectric のごとく，全く新しい Mecha-

nism による Typewriter にしても，その Keyboard のみは，旧配列をほとんど そのままに踏襲しているのである．

合理化を目的とするこの種の技術的な改良の直面する問題については，ひとりTypewriterの場合に限らない．その典型的な例としては 時計の文字板と指針をあげればよいであろう．60進法という特別な数え方にもその一因はあろうが，今日広く使用されている時計による時刻の読み取り方が いかに複雑なものであるかは，幼児に対する時計教育の場合を考えれば明らかである．太古の日時計の文字板をうけついだまま，短針に長針 さらには秒針を加えた構成が，今日に至るまで 標準的なものとして残されているのは，考えてみれば ひとつの不思議でさえあろう．最近ようやく数字直読式の，いわゆる Digital時計がRevivalしてきているが，合理的な時刻ないしは 時間表示に対する提案は 過去にも再三にわたり行われてきたのである．

BIBLIOGRAPHY

Bliiven, Bruce, Jr. *The Wonderful Writing Machine.* New York: Random House, 1954.

Current, Richard N. *The Typewriter and the Men Who Made It.* Urbana, Illinois: The University of Illinois Press, 1954.

Herkimer County Historical Sociey. *The Story of Typewriter, 1873-1923.* Herkimer, New York: 1923.

International Business Machines Corporation. *The History of IBM Electric Typewriters.* New York: 1951.

Paillard S. A. *Hermes Tastaturen-Keyboards.* Yverdon, Suisse: No. 932.

Russon, Allien R. and Wanous, S. J. *Philosophy and Psychology of Teaching Typewriting.* Cincinnati, Ohio: South-Western Publishing Company, 1960.

Flood, Hazel A. "The Invention and the Development of the Typewriter." *The Journal of Business Education* (January, February, March, and April, 1949).

2. Universal Keyboard の問題

2．1． Universal Keyboard の欠点

著しい Mechanism の改良にともなって Typewriter の使用が急速に普及するに従い，一層の Typing Speed の増加と操作の簡便化・合理化を望む声が高くなり その有効な解決方法として数次にわたり新配列による Keyboard の提唱が行われたのである．

しからば，Universal Keyboard の欠点は いかなる点にあるのであろうか．

最初にこの問題を指摘したのは，1922年の R. E. Hoke であり，続いて 1929 年の E. A. Riemer であった．両者の調査に共通する第一の点は，Universal Keyboard によって普通の

語彙の英文をうつ場合，左手の分担するKeyの方が右手の分担するKeyよりも多くなるという事実をあげ，これは，大多数の人間が右利きである以上，不合理を免れないというのである．

Riemerによれば，左手57%に対して，右手43%の比率になっている．TypingにおけるSpeedと持久力に対する実験の結果，左手は右手よりも10%以上低い成績しかあげられなかった．これは．かなりの練習量をもってしても補い得ないのである．

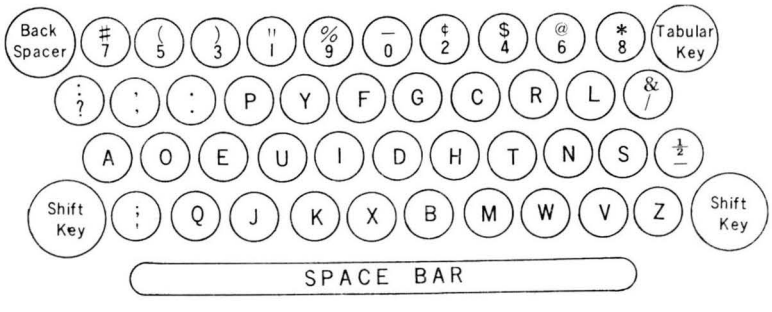
第二の点として，それぞれの指に対する分担が著しく不均衡であり，しかも，強い指よりも弱い指に，より大きな負担のかかる場合が多いということである．

その一例として，右手の中指の分担は僅かに7.2%過ぎないのに，左手の小指は実に8.2%を分担しているという結果をあげている．

要するに，Universal Keyboardにおける指の分担は，人間の指の能力を考慮する点が少く，甚だ非能率的であって，TypingのSpeedをさまたげ，Typistの疲労を増す要素を多く含んでいることになる．

こうした点について，さらに調査を進め，一層明確な結論を示したのは，1930年代におけるAugust DvorakおよびWilliam Dealeyおよびその協力者たちであった．“右利きの人間が左利きのTypewriterを使っているのは不合理だ”というDvorakの言葉は，よくそれを象徴しているが，この点は，既にRiemerの指摘した通りであった．彼等はさらに，Universal Keyboardの致命的な欠点として，最上段の数字を除く上・中・下段に配列された各Keyの使用度数を分析した結果を示している．すなわち，上段のKeyの使用度数の合計は52%に達するのに対して，中段のKeyの使用度数の合計は32%に過ぎず，この比率は当然逆にならなければならないと主張したのである．これは通常の場合に指をおくKey——いわゆるHome Key——が中段にあるからには，まことにもっともな説であろう．また，上段の使用度数が全体の50%以上を占めることから，中段を越えて，上段から下段，下段から上段へと同じ指を移さなければならぬ組み合せ——Letter Combination——がTypingの28%にのぼるというまことに不都合な結果を生じるとして，従来のUniversal Keyboardにかわる全く新しいKeyboardを提案したのであった．これがSimplified Keyboardである．

図 12



2．2．　Simplified Keyboard の提唱

1932年に特許を得た　Dvorak/Dealey の Simplified Keyboard は　図12　に示すものであるが，彼等はその長所として，次の点をあげている．

1．右手54%，左手46%になる指の分担は，人間の手の能力に適合し，無理がない．

2．すべての母音を左手の分担とした結果，右手だけでうたねばならぬ Word も Syllable もなくなる．左右相互にうつ組み合せは著しく増加して，全体の三分の二以上となるから Typing の Speed を増加し，Typist の疲労を軽減する．

3．それぞれの指に対する分担の比率も，人間の指の能力に適合している．

4．困難な指の組み合せ，特に中段を越えて上段から下段，あるいは下段から上段に同じ指を移さねばならぬ組合せは85%減少する．

5．隣接した指を連続してうつ組合せは90%減少し，同じ指を連続してうつ組合せは75%減少する．

6．全体の70%が中段の Key だけでうてるし，中段から上段，下段から中段へと指を移す組み合せも大いに減少する．

以上の結果，従来よりも遥かに，速く・正確に・楽に Typing ができることになるから，Typing 教育のための時間も大幅に短縮できるというのである．

ここで Dvorak が Simplified Keyboard の利点の中に Typing 教育の合理化という点を強調していることは，まことに興味深いのであり，彼等はその例証として，この新しい Keyboad により教育された学生の方が，従来の Keyboard で教育された学生に比し，格段に優秀な成績をおさめた資料を数多く提示しているのである．

2．3．　New Keyboard の後退

こうした数々の長所・利点にもかかわらず，Dvorak/Dealey の Simplified Keyboard は，結果として，従来の Universal Keyboad に取って代わることができなかった．しからばその理由は　いかなる点にあったのであろうか．Jane Clem によれば，新しい Keyboard の採用によって得られるものよりも，たとえ一時的であっても　失うものの方が多いというのが　大半の意見であり，Typing が既に Business の世界で大きな役割りを占めるに至っていたという時期的な問題が，もはや　この改革を不可能にしたと言っている．

Business の立場からすれば，新しい決定をするにあたって，それによって生ずべき利害・得失を優先的に考慮するのは当然であり，同じく 1930 年代よりはじまった Electric Typewriter の本格的な開発とその普及が，それなりに多少の抵抗があったにもせよ，急速に実現して行った事実と対比されるのである．結局 Keyboard を改めるよりも，電動化による能率の向上の方が有利と判断されたことになろう．そして，Electric Typewriter には，Speed の増加・疲労の軽減に加えて，均一で鮮明な印字という Typing の質的な改良をその大きな

利点としており，これは新しいKeyboardの採用によっても望み得ることがすくなかったのである．

Blackstone と Smith は，Typing 教育の見地から この問題を論じているが，新Keyboardにより教育された Typist が Office に入って来る場合，雇用者側は 新旧二種類のKeyboardによる Typewriter を設備しなければならず，たとえ過渡的であるにもせよ，こうした混乱とそれに伴う出費の増加に対して躊躇したことが，Simplified Keyboard の普及を阻んだ大きな原因であったとしている． さらに，ある時期には必要となるであろう従来の Keyboardにより教育された Typist の再教育の問題——彼等自身の抵抗をも含めて—— をも併せて，失う点の方が大きいと判断した場合の多かったことは，容易に想像できよう．

この場合，もうひとつ問題となつたのは，Universal Keyboard に熟練した Typistが，一定期間の再教育により，Simplified Keyboardに転換した場合，同じく優秀な Typist となり得るだろうかという疑問である．Dvorak によれば，これは可能であり，従来よりもさらに技倆と能力の向上が期待できると言っているが，これは軽々に判断できかねることであり，すくなくとも強い説得力を持つ根拠には欠けていたと思われる．

2．4． Universal Keyboard の部分的改良

Simplifled Keyboard のような，根本的 あるいは 徹底的な Keyboard の改革は，その後も有力とはならなかった． しかしながら，Universal Keyboard の不合理性ないし 非能率性の問題は残されたまま現在に及んでいるわけである．そしてこれは，Typewriterの構造的な改良という方法だけでは克服することの困難な問題なのである．しかしながら，部分的な Keyboard の改良に対する提案となれば， その後も数次にわたり行われ，あるものは実現されているのである．

図 13－1 **Electric**

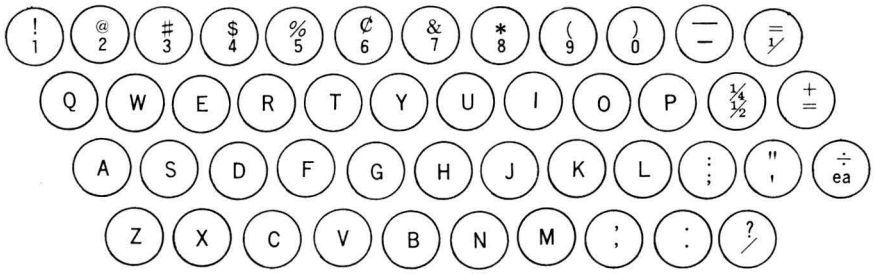
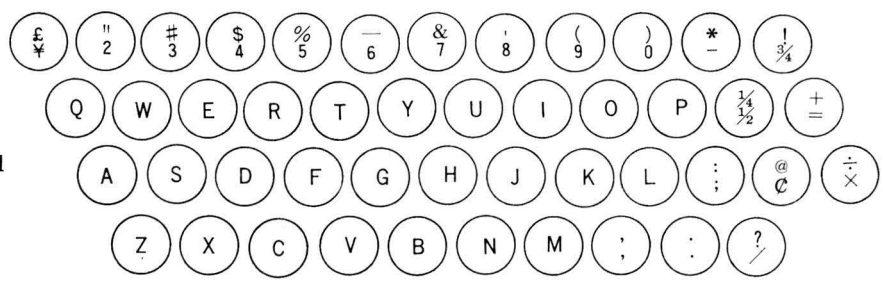


図 13－2 **Manual Standard**



その一例として Electric Typewrter の普及による，Electric Typewriter 用の Keyboard があげられよう．図13 は 現在市販されている Electric Typewriter の Keyboard を同じ Maker の Manual Standard Typewriter の Keyboard と比較したものである．

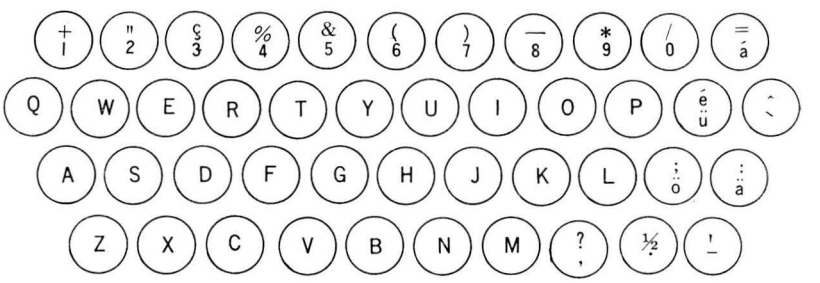
ほとんどすべての Electric Typewriter には，特定の活字を連続して印字できる Repeat Key の機構があり，そのために 連続して印字する必要のある活字を組み合せた方が便利であることから，最上段の数字と符記号の組み合せが改められている．この場合，電動化に伴う新しい機能に応じた Keyboard の部分的改良が受け入られたのである．

英語以外の Roma 字を使用する国語のための Keyboard についても，それぞれの自国語に特有な文字あるいは記号を備える必要から Keyboard に多少の異同があるのは当然であろうが，さらに使用度数を考慮して，部分的に Key の配列を変更する例もすくなくない．図4，5，6，7に見られるように Universal Keboard を基本としながらも 自国語の特性に応ずる変更が行われているのである，例えば 図6 の German Keyboard には，Ä ä，Ö ö，ü，β のような英語にない活字を備えるのは当然として，Ⓩ z と Ⓨ y の Key を入れかえてある．ドイツ語では前者の使用度数が後者に比して遥かに高いからである．

図 14

German

(Japan)



ここに述べた German Keyboad は，自国語用のものであるから，我が国で販売されている Typewriter の German Keyboard とは別である．図14 は後者であり，Ⓨ と Ⓩ と入れかえは行われていない．その理由は 我が国における German Keyboard の用途が，“English を主とするが，時に German もうちたい” あるいは その逆であることが多いからである．

こうした部分的な変更の結果を英語のための Keyboard の改良にあてはめることは当然考えられてよいのであるが，例えば，Stutsman は Ⓐ a Key と Ⓙ j Key の入れかえをするだけでも Universal Keyboard の欠点を大幅に軽減できると主張した．たしかに英語における A と J との使用度数には大差があり，前者が左手の小指という最も弱い指のひとつで分担し，後者を右手の人さし指という最も強い指のひとつで分担することは不合理である．こうした明瞭な事実が示されても，実際に自らの Typewriter の Keyboard を変更しようとなると，そこには大きな決断が必要であると言わねばなるまい．

2．5． Universal Keyboard と Typewriting 教育

Dvorak/Dealey の場合にせよ，Stutsman の例にせよ，理論的には　大いに根拠のある Keyboard の改革も，現実には　その実現が困難であり，仮りに音声がそのまま印字されるというような画期的な機械が開発されるまでは　おそらく Universal Keyboard は　従来の Typewriter と　その運命をともにするであらう．　しからば　現在の Typewriter と現在の Keyboard を使用して　いかに能率的な Typing を行うかということが当面の問題となってくる．そして，そのためには，Dvorak をはじめ多くの人々によって指摘された諸々の欠点と不合理とを　改めて認識する必要があらう．その上で，Keyboard の変更以外の方法でその欠点を克服ないしは軽減するための工夫が真剣に考えられなければならぬのであり，これが Typewriting 教育についても，基本的な前提として考慮すべき条件であることは　云うをまたない．しかも，我が国における Typewritig 教育については，全く文字を異にし，文法を別にする外国語をうつという大きな Handicap に加えて，短時間のうちに Keyboard の Mastering をはじめ Letter Typing, Manuscript Typing, Tabulation を含む Production Practice に及ぶ広範囲の Requirement を集中的に習得させねばならぬという制約を持っているのである．従って，その Programming を綿密かつ合理的に計画する必要性は，我が国の場合にあってこそ，特に大きいと言わねばならない．そしてその内容は，Universal Keyboard の欠点を充分に分析し，これによって生ずる諸々の障害を効果的に克服ないし軽減することのできる技術的な配慮が　その中心課題となってくるのである．

母国語をうつ欧米諸国にあっては，ほとんどの家庭に Typewriter が普及している現状であるから，Keyboard の Mastering にはじまる初歩的な Typewriting の技術は，家庭及び初等教育の場において，試行錯誤的に，長い時間と豊富な練習量を通じて習得することが可能である．学校における正式の Typewriting 教育は，その上に立って，むしろ Production Praticeを中心に行うことが可能である．すなわち．我が国の場合とはその出発点において既に大差があると云うことができよう．

BIBLIOGRAPHY

Blackstone, E. G. and Smith, Sofrona L. *Improvement of Instruction in Typewriting.* 2d ed. New York: Prentice-Hall, Inc., 1949.

Clem, Jane E. *Techniques of Teaching Typewriting* 2d ed. New York: Gregg Publishing Division, McGraw-Hill Book Company, Inc., 1955.

Dvorak, August ; Merrick, Nellie L.; Dealey, William L.; and Ford, Gertrude C. *Typewriting Behavior.* New York: American Book Company, 1936.

Hoke, R. E. *The Improvement of Speed and Accuracy in Typewriting.* New York: John Hopkins Press, 1922.

Paillard S. A. Hermes Tastaturen-Keyboards. Yverdon, Suisse: No. 932.

Russon, Allien R. and Wanous, S. J. *Philosophy and Psychology of Teaching Typewriting.* Cincinnati, Ohio: South-Western Publishing Company, 1960.

Dvorak, August and Dealey, William L. "Simplified Keyboard Arrangement." U. S. Patent Office, Serial No. 612, 738, 1932.

Lincoln, W. Hazel. "'New' Typewriter Keyboard." *The Journal of Business Education* (April, 1956).

井口美登利, "イレクトリック・タイプライター（その普及と効用)" 東京立正女子短期大学 論叢（昭和41年)。

Stutsman, Galen. "Reverse the 'A' and 'J' Keys?" *The Journal of Business Education* (March, 1959)。

Riemer, Edwin A. "A Revised Keyboard for the Typewriter." Master's Thesis, New York University' 1929. (Quoted in *Philosophy and Psychology of Teaching Typewriting.* p.5)

文型練習における問題点

田島富美江

はじめに

Fries は Oral approach について "The oral approach centers attention fundamentally upon learninig a language as a set of symbols to be spoken and understand when heard."(1) と述べ，更に，それは言語学習の最初の段階で達成すべき目的を指す名前であり，その目的とは，口頭での発表 (oral production) および，話された場合の理解 (receptive understanding) に必要な一群の習慣を作ることである，としている。そしてこの oral production の面を受け持つのが，文型練習である。言語学習が habit-formation であることは，Fries のみならず，Palmer によってもすでに述べられたことであり，また W. M. Rivers や B. F. Skinner 等が心理学の面からの研究をすすめて，habit-formation のために文型練習のような反応学習を支持している。

しかし，この文型練習に，最近批判の声があがっていることは疑いない。すなわち，教室内では oral production の練習がなされているのに，それが実際の生活場面に活かされていない，ということである。この時にあたり，文型練習の問題点を探り，今後のあり方を考察してみる必要があるように思われる。

文型練習の原理と現状

実際の生活場面における oral production の能力を養うためには，Fries や Lado の主張する文型練習だけで充分なものではない。しかし，英語学習に重要な sentence pattern を耳と口 (recognition と production) によって練習し，将来，いかなる situation に遭遇しても，正確に発表できる言語習慣を形成する，という立場をとる oral approach において，文型練習の占める比重は，かなり大きいといえよう。

そして，先ず第一に音声面 (pronunciation, rhythm, intonation) の指導に重点をおくことを強調した Fries は，さらに，文型練習は，意味を無視するものではない，と次のように述べている。"The danger in the use of pattern practice procedures is that the production on the part of pupils may become mere mechanical manipulation of meaningless words in substitution and conversion exercises. To avoid this difficulty pattern practice should preserve (certainly at the beginning) the situation and the contrasts with which the material is introduced. These contrasts and this situation are defini-

tely the clues to the meaning that is to be grasped, and the pattern practice exercises must enforce the teaching of meaning."[2] 文型練習は，単なる機械的練習に終らず，場面を重視し，それを通して，意味を教えなければならないという考え方である。すなわち，意味を教えながら音声面を重視して，文型を定着させ，実際の場面に応用させる，というのが文型練習の原理といえよう。が，実際に，どの程度までこの原理が理解され，実行可能であるかは問題である。

山家氏は Oral approach の解説の中で，文型練習のすすめ方を細かく述べたあと，まとめとして，文型練習は speed が大切であることを強調している。"基本文型が，まだ頭の中に聴覚心像（accoustic image）として残っている間に，次に移ることが大切で，あまり時間をおくと，それは oral composition となって文型練習にはならない。両者を区別するのは speed の問題である。"[3] と結んでいる。即ち accoustic image を中断せずに，刺戟，反応の過程を連続的にくり返すことを主張しているところから，文型練習はややもすれば，意味の段階をはずしがちで，単なる機械的な反復模倣学習に終る可能性があると考えられるのである。

勿論言語学習において，この機械的反復模倣学習を認める学者は少くない。Rivers は Watson の代表する行動主義心理学の立場から強化説をとり，"外国語学習は，常に正しい反応をひき起すような習慣を確立し，さらにその反応に，くり返し報酬を与えれば，その反応は強められて確固たるものになる。この点で効果的なのは，学習者が試行して誤った反応を放置するより，模倣できる正確な反応のモデルを提供してやることである。そして，正しい反応の習慣が確立してしまえば，ある手がかりが出現した時，それに対する特別の反応が優勢となる。"[4] との考えから，機械的反復模倣学習による習慣形成を支持している。また R. Polizer も，教師の真の技能は，間違った反応を訂正したり罰したりすることにあるのではなく，生徒が正確に反応するようにしむけられるような場面を作り出すことにある，として，Rivers と同様の見解を示し，また両者とも意味の理解が無くとも般化が可能であることをのべている。

ここで，われわれの日常の言語行動を考察してみる必要があろう。それは言語を運用する個人の，刺戟に対する主体的な反応である，ということができる。すなわち，"環境からの刺戟を，全く受動的に受けとめて記銘するのではない。人間は主体的な欲求や，場の要求にしたがって，環境から来る情報の中の重要なものを選択的に記銘し，不必要なものを無視し"[5] そして，これまでに記銘され，保持された経験を，適切な場に遭遇したときに，適切な形に変えて再生する行動，これが言語行動であることは，われわれが日本語を日常いかに使用しているかを思い起せば，容易に理解できることであろう。

文型練習が批判されるのは，実にこの点（すなわち，再生する能力）が養われないことにあるといえよう。

現在一般に陥いりがちな文型練習の方法は，基本文型の反復，代入，付加，転換など，そのいずれにおいても，外部からのコントロールによって，特定の一文内での文の操作に終始しているため，教室での oral production の回数は多くても，学習者には，ただ音声の連続にすぎない，主体性の欠けた，非言語作業に終る場合が多い。このような練習形式は，意味の理解を無視しても，また situation と無関係であっても，スムーズに進行していく危険性を多分に持つものであり，学習者にとっては，機械的 imitation, repetition にすぎないといえよう。したがって以上のような文型練習においては，刺戟に対する学習者の反応が speedy で且つ正しかったとしても，それは単なる筋肉運動にすぎず，意味の理解を伴わないために，その場限りのドリルに終ってしまうため，他の類似の場面に遭遇しても，それらを produce することが困難なのである。

文型練習における学習過程

文型練習の目的を達するために要求される学習過程には二つの種類があげられる。

(1) 機械的受容学習過程

これは，筋肉運動の機械的訓練であるから，意味の体系を通らない。Palmer の "the five speech-learning habits" の中の "catenizing" に当るもので，一定の語や文の発音を連続的に練習し，学習した事がらが無意識的，機械的に口をついて出て来るよう，発音器官に関係する筋肉の運動を慣らすことである。発音の練習は勿論のこと，その他では have 動詞，be 動詞などが良い例である。I have……. という文の主語 I が He になれば自動的に has が口をついて出て来るような訓練をさすのである。

(2) 意味的受容学習過程

これは意味のある学習を受容すること，すなわち，学習者は，呈示された言語材料を理解し，他の場面において必要なときに再生し，活用できるように，記憶保持することで，シンタックスの学習などがその例である。

文型練習を，教室における練習だけに留めず，教室外での場面に応用させるには，この意味の体系を通る練習も必要であって，文型練習においては，この二つの過程のいずれに偏よることも許されないのである。

(1)は，刺戟と反応の連続によって sentence pattern を定着させようとするものであるが，外国語の機械的学習は，忘却されやすく，したがって，学習材料は，以前に学習した概念体系との関連を失っているために，各授業時間における練習は，ばらばらで，その時間限りに終るために定着性がないわけである。行動主義心理学ではこの忘却を防いで，学習を定着させるために，かなりの過剰学習を必要とする立場をとっている。しかしそこには，練習の単調さや疲労の問題が生じ，また再生に当っては，選択する能力を減少し，きまりきった反応を固定してしまうために，他の状況の中で使用しようとするときは，却って役に立たなくな

る，との批判も出ており，過剰学習により，ある程度の忘却が防げたとしても，結極，筋肉運動の域を脱していないために，実際生活の場における効果は，はなはだ疑わしい。

この過剰学習の点に関して，ゲシュタルト心理学者達は次のように考察している。すなわち，反復練習を長く継続する程，記憶痕跡は，練習したことがらの再生にはますます役立つだろうが，その結果，他の状況の中で，使用する時は，かえって役に立たなくなる。また長時間におよぶ反復練習は，生徒を融通のきかないようにさせる，と。

この忘却を防ぎ，学習したことがらを応用できる能力を養うためには，前述の学習過程の(2)による方法をとらねばならない。学習結果を記憶し，保持することが大切であるために，練習する個々の文全体の意味を理解させながら，文型練習を進行させる方法をとらねばならない。記憶を長い間保持するには，その意味を明確に理解すること，すなわち，文型練習にあっては，文とその意味の連合（意味づけ）をつくることが必要である。

前述の機械的反復ドリルが，非言語現象に終っているなら，それは意味づけが行なわれていないために，記憶に残らないことはいうまでもないことで，そのドリルは，学習者の oral production の回数がいかに多く行なわれても，学習過程(1)の域を出ていない。エビングハウスは，意味の不明確なものより明確なものの方が記憶しやすいことを実証し，このことは，他の多くの実験によっても立証されている。また Fraser らは，模倣学習（imitation）と，理解（comprehension）と，口頭発表（production…… この production は，環境から来る情報に反応する主体的な意味での発表である）の関連について，興味ある実験結果を得ている。[5] これは母国語学習についての実験であるが，3才児12人を対象として，10項目の文法的事項について検討し，次の如き結論を出している。[6] すなわち，3才児においては，production は comprehension に先行しないが，imitation は comprehension に先行すること，またその個々の item の得点について検討した結果，imitation は，意味の体系を通らなくても働く，知覚運動技能であると解釈していることなども，文型練習を考察する上での参考になるものと思われる。

Palmer の理論

外国語学習と意味の問題をとりあげて，より詳しく分析し研究したのは，Palmer で，それは彼の主張する Fusion の段階に最も良く説明されている。The Principle of Language-Study によれば，Palmer は音声面を決して軽視しているわけではない。外国語学習は口頭による作業から入るべきで，聞き方，話し方を合理的に訓練して，はじめから良習慣を養い，そのあとで読み書きにすすむことが経済的であるとのべ，言語学習の根本は特に言語習慣の養成にあることに中心をおき Identification から Fusion に達することが最も重要であるとする。

この第一段階の口頭の作業は，次のように分析することができる。

伝達者（概念→聴覚像→発声作用）→相手（聴覚作用→聴覚像→概念）

そしてこの中で特に重点をおいているるのは Fusion である。彼によれば，言葉の音声や意味が判つただけ　では Identification の段階にすぎないのである。この段階は一時的な説明によっても実現される。しかし Fusion の段階とは，聴覚像と概念との間の連想関係を強くすることである。すなわち，概念が頭に浮かんだらすぐに聴覚像が思い出され，また聴覚像が浮かんだらすぐ概念が思い出されて，発音の準備体制ができるようになることである。しかもこれがどちらの方向にでも自由自在にすすむことができるようにしなければならない。すなわち，外国語と意味（母国語の訳語という意味ではない）が，溶接された金属のように結合した状態を Fusion といい，これは言語行動の反復練習によらねば実現されないのである。言語学習はこの identification から fusion の域に達してはじめて，意味の習得——すなわち semanticizing——が完成されたことになる。

要するに accoustic image と concept の連合を強めることである，このことは外部からの control による機械的反復ドリル形式のみでは達成されるものではなく，練習中に，学習者自身が主体的にその両者を連合させながら，produce するよう常に努力することが必要である。そして，連合を強めれば強める程，意味の理解が明確となり，記憶力は助長される。この練習方法により，はじめて外国語が記憶されるのであって，さらにそれが長い間保持されれば，類似の場面に出合った場合に，以前の学習結果が自動的に再生される。すなわち学習効果は転移するわけである。

文型練習は“生徒の注意力を問題それ自体以外の何かにひきつけて，問題の pattern をドドリルする速い口頭練習である”(7)と Lado はのべ，スピードのある練習を要求しているが，文型練習に Palmer の fusiona の概念を織りこむことは教授上困難であろうか。

実際に学習現場での文型練習において accoustic image と concept を連合させながら言語行動を反復練習することは，教師にとっても学習者にとっても，困難なことで，特に外国語学習を始めたばかりの低学年の学習者にとって，それを主体的に連合させることは，知能の発達段階からみて不可能であるといえる。教室内の場面や身近かにあるものをそのまま補助教材に使用できる段階では，それ程困難ではないが，少しすすんで教室内では間に合わなくなった時には問題である。記憶を保持するためには，概念を視覚化することが最も有効であるため，教師は視覚化を可能にするような方法で授業をすすめることが大切である。したがって抽象概念を扱う場合には，でき得る限り具体的場面や事物を思い起させ，場面的脈胳の中で意味を理解し，その中で，生徒独自の力で oral production ができるよう指導するところに文型練習における教師の役割りが存在するのである。この辺の学習を容易にするためには，視覚教材に関する教師の工夫が期待されるわけである。この点に関しては，視聴覚教育の分野での，今後の研究課題となるであろう。

む　す　び

Oral approach の重要な一部分を占める文型練習を有効なものとするために，機械的学習と，意味的学習に焦点をあてて考察してみた。

機械的になりがちな文型練習において，いかにして意味づけを行なうかという具体的な問題は各教師に与えられた課題である。練習時のスピードをやや落して，意味づけの段階を完全に行わせる方が効果があるかも知れないし，また先に文の理解をさせてから訓練に入る方が良いかも知れないというような意見も多くのところで聞かれるように，方法は無数に存在する。また教授法は，学習者の質によっても大いに変えなければならないため，各教師は一つの教授法をそのまま受け入れることなく，多くの教授法を参考にして，独自の教授法をうち立てるべきである。

注

(1) C. C. Fries: Teaching and Learning English as a Foregn Language, 1960, p. 14

(2) C. C. Fries: Foundation for English Teaching 1961, p. 342.

(3) ELEC: 英語と英語教育，1965, pp. 165-175.

(4) W. H. Rivers: The Psychologist and the Foreign Language Teacher, 1964,（五十嵐二郎訳:「外国語教育と心理学」1967. pp. 60—61.

(5) 波多野完治他: 学習心理学ハンドブック，1968, p. 92.

(6) C. Fraser, U. Bellugi & R. Brown: Contorl of Grammar in Imitation, Comprehension and Production J Verb Learn Verb Behav., 1963, 2, pp. 121—135.

(7) Lado: Language Teaching. p. 105.

CONCERNING TEACHING ENGLISH PRONUNCIATION AT SCHOOL

Namiko Tadokoro

I

It is said that language learning can be interpreted as a process of imitating. If so the question is what to imitate when we try to master a foreign language with special reference to its phonetic system at our very beginning stage of learning.

Having been concerned with teaching English pronunciation, I have often wondered as to the selection of a model to present for the students to acquire when teaching pronunciation at a junior high school where the most fundamental instruction on the target langage is given.

The question, "What kind of English should I teach?", or in other words, "What type of pronunciation should the students imitate and master?" has come into our focus because we can recognize various notable different types of pronunciation in each of the English-speaking countries of the world.

According to Prof. Strevens[1] the English-speaking countries can be classified into two groups, i. e. 'independent' area versus 'dependent' area through his observation of the attitude of the users of English toward their pronunciation.

In his 'independent' area including the United States of America, Canada, Australia, and the West Indies, English is a completely assimilated native language and the people living in those nations have succeeded in establishing the acceptable variant pronunciation in the course of the history. The significant thing here is that this kind of divergent pronunciation is thought to be a desirable thing."[2]

On the other hand, the 'dependent' area means countries such as India, Pakistan. and the African nations which were put under the influence of British colonization for a long time. In these 'dependent' countries, English is largely used but in most cases it is the second or the official language besides the native languages for the purpose of facilitating mutual communication. For this reason, the pronunciation of English in those 'dependent' areas has been affected by the other native languages to such a great extent as to make up a distinct local tradition. Unlike the people of

the 'independent' area, those who have fostered this local tradition do not regard their variant pronunciation as a desirable thing. So, such varsietie have not been attached with any prestige.[3]

II

The study on these phonological varieties has, oddly enough, been neglected in the past years so that Prof. Strevens calls it as "one of the most improtant yet least satisfactory aspect of teaching English outside of England."[4]

Among these varieties of pronunciation, without doubt, the so colled American English and British English constiute two main entities. However, as Prof. Christopheresen pointed out,

> "Traditionally, since the introduction of language teaching on modern lines at the end of the nineteenth century, 'Received pronunciation' has been practically the only type of English taught in Western European countries."

Obviously the British variety alone had the education merit.

After World War ll, with the United States becoming the World's leading power, the situation has been changed as time goes on. Not only in the international affairs but also in the linguistic matters, the influence of America has come to be enormous. Backed up by the progress in linguistics, the disemination of American English has been more accelerated in recent years. As a result of this, in a global scale,

> "American forms of English are now accepted, either side by side with British forms or even in preference to them, in a number of new countries where before 1945 'English' meant 'British English."[6]

With regard to this, I would like to draw another citation here. David powel says.

> "In contries where English is taught as a foreign language the question as to what accent is to be preferred crops up increasingly, mainly as a result of the growth of international exchange and the general influence of the English-speaking countries, particularly that of the United States of America The question is being posed by teachers of English as well as by educational authorities at all levels of teaching."[7]

Now toward this question, what solutions can be given? Some of the very interesting suggestions to reach at the problem were already given. Let me briefly summarize them.

The first solution is presented by Prof. Christophesen, who asserts of creating a

kind of 'International English' which is free from each national variation. This 'International English' is supposed to play a role quite similar to that of Latin in the Middle Ages.

The second was suggested by Prof. Strevens. According to him, we should aim to help the afore-mentioned 'dependend' dialects to become 'independent so that the acceptable native pronunciation may be established. Until this is done, what we had better do is to adopt British English as a model in teaching English as a foreign language.

The third opinion is typically assertted by Powel who thinks the American English is recommended to those who want to take up English for their study.

(to be continued in the next issue of Ronso)

(注)

(1) Peter Strevens, "English Overseas: Choosing a model of Pronunciation," English Language Teaching, X, No. 4, (July-September, 1956), 123-131.
(2) Strevens, 124.
(3) According to Prof. Strevens, people speaking such forms do not feel confident in speaking it especially when there were only few British occupied the important positions in the country.
(4) Strevens, 123.
(5) Paul Christophersen, "Toward a Standard of International English," English Language Teaching, XlV, No. 3, (AprilJune, 1960), 127-138.
(6) M. A. K. Halliday, Angus McIntosh and Peter Strevens, Linguistic Sciences and Language Teaching, (London, Longmans, 1964), 293.
(7) David R. Powell, "American vs. British English," Language Learning, No. 3, 1 & 2, (1966), 21-39.

参 考 文 献

Christophersen, Paul. "Towards a Standard of International English." English Language Teaching, XlV, No. 3, (April-June) 127-138.

Fries, Charles C. "On Varieties of English." Lectures by C. C. Fries & W. F. Twaddell, ELEC, 1958, 1-12.

Halliday, M. A. K. and others. The Linguistic Sciences and Language Teaching, London Longmans, 1964.

Marckwardt, Albert H., and Quirk, Randolph. A Common Language. London, Cox and Wyman Ltd., 1964.

American English. New York, Oxford Uuiv. Press, 1958.

Powell, David R. "American vs. British English." Language Learning XVl, Nos 1-2, (1966), 31-39.

Stevens, Peter, "English Overseas: Choosing a Model of Pronunciation." English Language Teaching, X, No. 4, (July-September 1956), 123-11.

Trim, J. L. M. "English Standard Pronunciation'" English Language Teaching, XVl, No. 1, (October-December 1961). 28-7.

石橋幸太郎　クエスチヨン・ボツクス・シリーズ（発音）　大修館書店 1960

斎藤　静　新英語教育講座，第9巻　主幹．市河三喜　研究社 1949（改訂版1956年）

A Study on TV Viewing Pattern and Social Relationships

A Thesis Presented
to the
Faculty of the Graduate School
of
International Christian University
for the
Degree of Master of Arts

in
Education

Kazuko Okamoto Moore

June 1, 1968

Preface

I would like to express my heartfelt gratitude to·····

Dr. Takeo Furu, Director of ICU A-V Center, who not only gave me the suggestion for this research as an authority in the field but also guided me through the process of this study as my thesis advisor.

Sister Maria Philmenee, Dean of Shirayuri Women's College, and

Mr. Tsunemaru Iwamoto, Dean of Tokyo Rissho Junior College for Women, both of whom have kindly offered me their freshman and sophomore students as the subjects of this study.

Mr. Kenichi Hirata, A-V Assistant of ICU, who has always been willing to share with me his technical knowledge.

Messrs. Takashi Ikuta, Morito Takahashi and Miss Yoshie Nakagawa, students of A-V Section, ICU Graduate School, who have spent precious time in shifting and calculating data on punch cards.

Miss Masako Fuchigami, secretary of Tokyo Rissho Junior College for Women, who has typod my papers.

Dr. William Moore, my dear husband, who has continuously givien me his support to accomplish this work.

ICU, 1968 Kazuko O. Moore

Contents

Preface

Chapter I. Introduction ····· 11

Previous Studies ····· 11

Variables Which Predict Media Behavior ····· 12

Purpose of Study ····· 13

Chapter II. Research Design ····· 15

Working Hypotheses ····· 15

Subjects ····· 15

Instrument ····· 15

Date ····· 15

Place ····· 15

Independent Variables ····· 15

Dependent Variables ····· 19

Analysis of Data ·····

Chapter III. Sommary and Interpretation ·····

Table of Results ·····

Appendices ·····

Inquiry of Mass Communication·····

Good-Poor Analysis of Reference-Group Index ···

Biblioqraphy ·····

Chapter I

Introduction

What Have Been Discovered by Previous Studies?

There have been many empirical studies, both foreign and domestic, about children's media behavior. Dr. Takeo Furu,[1] after his comparative analysis of enormous amounts of deta gathered from various surveys done in Japan,[2] points out some facts which coincide with the results of research conducted by Schramm, Lyle, and Parker (1961).[3] The following are the main facts commonly discovered about children's media behavior both in the United States and in Japan beyond the differences of nationality and cultural enviroment of children;[4] (1) In general, children establish their regular TV viewing habit around age of three. (2) The amount of TV viewing time increases in proportion of their growth up to their early adolescent period. Here they reach the first peak in TV viewing amount. (3) Hereafter, the amount of viewing time decreases until they enter adulthood when they become even heavier TV viewers than they are at the first peak in early adolescence. (4) There exists so-called "turning point"[5] of their media behavior sometime during their early teens.

Among the most important reasons why they temporarily stay away from television is that their evaluation of TV as the source of information changes a great deal.[6] Before this point, children with high IQ tend to view television more than those with lower IQ. After this point, children with high IQ seem to become more dissatisfied with television. This fact leads them toward more serious media like printed materials. The difference of sex, as well as IQ and age, becomes more significant in their TV program preference.

Explaining this remarkable change of media behavior in children's lives, Schramm, et al. put it as the change from "fantasy-seeking" to "reality-seeking."[7] The term "turning point" is used by Dr. Furu of ICU somewhat differently from the way it used by Schramm and others. He expands the connotation of the term as the change from "fantasy content" to "reality content" rather than the mere change from television (as fantasy medium) to print (as reality medium). "Turning point" in his sense has been proved by the results of Osaka Survey (1962) conducted by the Osaka

Scientific Education Center, the survey by Ministry of Education (1961), the Shizuoka Study (1957-9), and the Tokyo Survey (1958) by NHK RTCRI.[8] In order to get really fruitful results about the agents behind media behavior, Dr. Furu suggests us to pay more attention on "interaction" among the characteristics rather than "demographic" individual factors such as age, sex, IQ, socio-economic status of parents, living conditions, etc.[9]

What Are to Be Considered as the Variables Intricately Acting behind Media Behavior?

M. W. Riley and J. W. Riley, Jr. (1951) first attempted to use sociological concept such as "group membership," "reference group," and "strain" as operational variables closely related to the selection of media contents.[10] They were convinced that parents and peers are the most important groups for children in the period of both pre-adolescence and adolescence as well.

E. E. Maccoby (1954) found the fact that upper middleclass children with strained relations with their parents spent more hours watching television.[11] Using skilful indirect approach, Schramm, et al. (1961) have gained the similar result. As the predicting variables of media behavior, they used "conflict," "frustration-aggression," together with social norm, IQ, and others. According to their theories, the higher the children's conflict and frustration-aggression, the more they seek after fantasy type of medium like television in order to escape from tension in their real lives. At the same time, the lower their IQ, the higher their conflict. The same thing can be said about elder children and boys compared with younger children and girls. Children belonging to the lower social class tend to be fantasy seekers, since their social norm is so-called "immediate-reward" pattern. In this sense, there are two types of children; 1) "fantasy- oriented", and 2) "reality-oriented".[12]

Here again, however, the doubt that Dr. Furu raises as to whether we should put all the fantasy-oriented children into the one category of "escapists" seems very meaningful for the future researches in this field.[13] Even the result of the survey done by Schramm, et al. shows clearly the fact that the sixth graders feel less conflict with their parents than the tenth graders in spite of the evidence that the former watch television more than than the latter.[14]

Purpose of the Study

To find out the reality of TV viewing pattern, as one of the aspects of media behavior, about Japanese youth is the aim of this brief atudy. Youth is, as is well known, the most instable period, both physically and psychologically. This is the stage of the so-called half-child and half-adult. In this maturing process, the long authorized images of teachers and parents somehow begin to show their "clay feet." Persons now must reestablish their new system of values. In spite of their mighty efforts to become more independent from the ties of their parents, they are still relying upon them, especially for financial help. Their sensitivity about their own physical appearance grows keener as they become more concerned about the opposite sex. Yet, this kind of inner affliction is too personal to discuss frankly with their teachers, parents or friends.

As the title tells, the emphasis of this study will be put on the social relationships of youth in connection with their TV viewing pattern. Its theoretic bases are mainly from Riley,[15] Schramm, et al.[16] and Dr. Takeo Furu.[17]

1) Ex-Chief Director of NHK Radio & TV Culture Research Institute, present Chief Professor of A-V Section, Graduate School of Education, International Christian University, Tokyo. His work on comparative analysis; Research on Television and the Child in Japan, Studies of Broadcasting, NHK RTCRI Survey, No. 3, 1965 pp. 51-83
2) Tokyo Univ. Team (Tokyo, 1962), NHK RTCRI (nationwide, 1960), Ministry of Education (nationwide, 1956), Shizuoka Survey (Shizuoka, 1957-9), and others.
3) cf., Television in the Lives of Our Children, Stanford, Calif., Stanford Univ. Press, 1961
4) cf., T. Furu, The Function of Television for Children--A Cross-Cultural Study--,Studies of Broadcasting, No. 5, 1967
5) cf., Schramm, et al., ibid., p. 31
6) ibid., pp. 34-5
7) ibid., p. 101
8) Dr. T. Furu was the director of this survey.
9) cf., T. Furu, Domestic Educatiom and the Role of Teleision, Survey and Theory on School Broadcasting, NHK RTCRI, Tokyo, 1966, pp. 141-214
10) M. W. Riley and J. W. Riley, Jr., A Sociological Approach to Communication Research, Public Opinion Quarterly, Fall, 1951, pp. 445-460
11) E. E. Maccoby, Why Do Children Watch Television?, Public Opinion Quarterly, 18, 1954, pp. 239-244
12) Schramm et al. use these terms for children of high television, low print (fantasy-oriented) and for those of low television, high print (reality-oriented) beside two other groups such as "low users" and "high users."
13) cf., T. Furu, Why Do Children Watch Television?; Variables Which Predict Media Behavior, Educational Studies, ICU Institute of Education, I-A, No. 12

14) cf., Schramm, et al., ibid.

15) cf., W. Riley, ibid.

16) cf., Schramm, Chapter 7, ibid.

17) Indices for this research were adapted mostly from Dr. Furu's previous and present surveys with his permission.

Chapter II

Research Design

Working Hypotheses

The following are the working hypotheses derived from three aspects of the students' social relationships:

(1) In the relationship with their parents, the higher the aspiration of their parents the more the students they will become "fantasy seekers.*"[1]

(2) In the relationship with their peers, students who belong to no "peer group" and put their "anchorage points" on the peer norm will become "fantasy seekers" because of the "strain" created by this situation.[2] (2) In the relationship with their own selves, students with inner affliction will become "fantasy seekers" in order to release their "tension" and "stress" vicariously.

Subjects

Number: 275 students (87% of enrollment)
84 freshmen of Shirayuri Women's College
93 freshmen of Tokyo Rissho Junior College for Women

Sex: All female

Age: Between 18-20

Instrument

Questionnaire entitled Inquiry of Mass Communication including 13 indices (89 items) to determine five independent variables, four dependent variables, and three other criteria.[3]

Date: February 23-27, 1968

Place: Shirayuri Women's College, 1-25, Midorigaoka, Chofu City, Tokyo
Tokyo Rissho Junior College for Women, 1-339, Horinouhi, Suginami-ku, Tokyo

Independent Variables

1. Socio-economic Status

This index of socio-economic status is based upon the occupation and education of the student's father.[4] By coupling occupation with education, we finally gained the three levels of socio-economic status.

Father's Occupation

Subjects checked one of the ten leveled occupations.[5] The Centers occupational categories were dichotomized so as to put professional, managerial, and proprietal in the upper part; sales, clerical, skilled mechanichal, semiskilled, service, farming, and fishing categories in the lower part:

High ..... n. 148 (54%)

Low ..... n. 126 (46%)

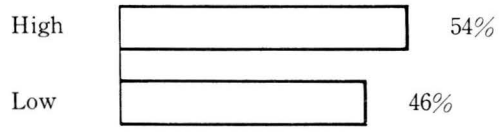


Figure 1. Two group of occupatioal status

Father's Education

Subjects checked one of the three levels of education.

1) College graduate, 2) Senior high school graduate, and 3) Junior high or primary school graduate. Then we gained the next two groups:

High) College level) ..... n. 162 (59%)

Low (the rest) ..... n. 112 (41%)

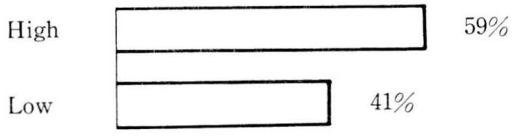


Figure 2. Two group of educational level

Occupation x Education

Combinations of occupation and education:

H. H. ..... n. 113

H. L. ..... n. 35

L. H. ..... n. 49

L. L. ..... n. 77

Finally the three levels of SES were made as follows:

H. H. (High) ..... n. 113 (41%)

H. L., L. H. (Middle) ..... n. 84 (31%)

L. L. (Low) ..... n. 77 (28%)

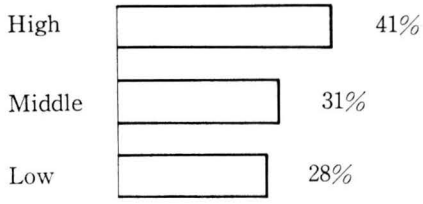


Figure 3. Three levels of SES

2. How Many TV Sets Do They Have at Home?

Subjects checked either 1) one set, or 2) two (or more) sets of television at home.[6]

1 set·····n. 108 (39%)

2 (or more) sets·····n. 167 (61%)

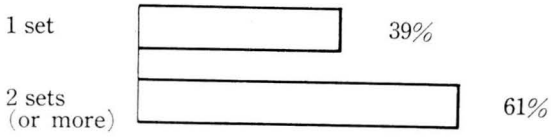


Figure 4. Two groups of TV owner

3. Group Membership

Subjects checked either 1) "Yes" or 2) "No" to the question: "Do you have any friends with whom you can discuss matters frankly?"

"Yes" answer group checked one of the five items asking "How many such friends do you have?".[7] Then the subjects were divided into either members, or non-members, roughly speaking, of peer groups.[8]

Family member·····n. 106 (39%)

Peer group member·····n. 169 (61%)

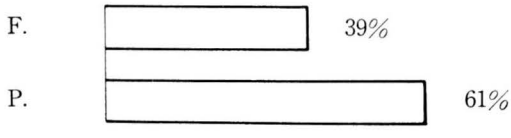


Figure 5. Two groups membership

4. Reference Group

According to their predominant reference groups,[9] the subjects were roughly classified into those who were more apt to use parents as a reference group, or to use peers as a reference group. Subjects were asked 19 indirect questions to indicate their references in various communication activities in daily life. Subjects checked one of

the five leveled situation of each item. Putting weights from one to five to each item, the total scores were obtaind.[10] Thus, the subjects were divided into the next two categories of Family group, and Peer group.[11]

F. G.·····n. 135 (49%)

P. G.·····n. 140 (51%)

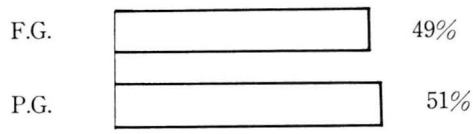


Figure 6. Two categories of reference group

Group membershipx Reference group

The four group weremade by the combination as follows:

F. (f)·····n. 59 (21%)

F. (p)·····n. 47 (17%)

P. (f)·····n. 76 (28%)

P. (f)·····n. 93 (34%)

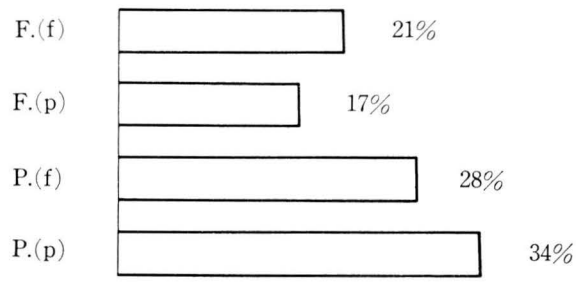


Figure 7. Four group of membership x reference

5. Conflict with Parents

Subjects checked one of the five degrees of satisfaction on various points by both parents and themselves.[12] When parents' aspirations showed higher than the subject's own satisfaction, the difference was regarded as the existing conflict between parents and subjects. Four pairs of situations--school achievement, studying length at home, taste of clothing, and hair style, and intimate friends--were checked. Putting weights from one to five, we gained the total score of each subject. Thus, they were divided into the next two categories: 1) those who have conflict with parents, and 2) those who have no conflict with parents:

Conflict ····· n. 119 (43%)

No Conflict ····· n. 156 (57%)

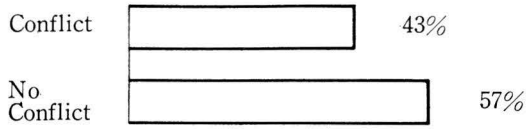


Figure 8. Two groups of conflict with parents

Dependent Variables

1. Amount of TV Viewing Time

Subjects gave average amount of T V viewing tine 1) during week-days, 2) on Saturdays, and 3) on Sundays. Then, the total score of each subject was put into the categorized number which increases every 30 minutes.

	Total score	Mean Score	Average hours
Week-days	1093	4. 83	2 hrs. 24 mins.
Saturdays	1471	5. 42	2 hrs. 42 mins.
Sundays	1722	6. 35	3 hrs. 12 mins.*

(N-271) * The range was from 0 to 11 hours.

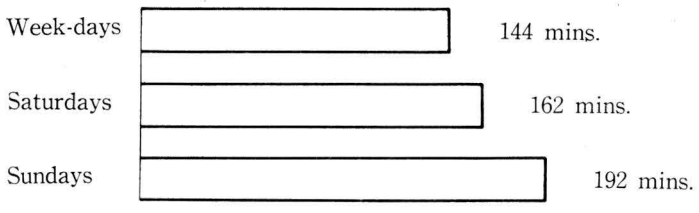


Figure 9. TV viewing time on three different days

Category Nos.		
1- 4	n. 11	(4%)
5- 8	n. 32	(12%)
9-12	n. 44	(16%)
13-16	n. 83	(31%)
17-20	n. 43	(16%)
21-24	n. 27	(10%)
25-28	n. 17	(6%)
29-48	n. 14	(5%)

Category Nos.

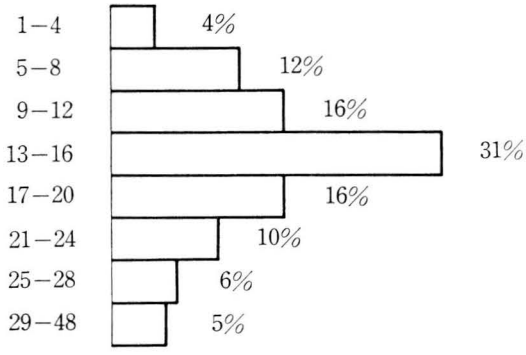


Figure 10. Categorized amount of TV viewing time

2. Preference of TV Stations

Subjects checked either 1) non-commercial or 2) commercial stations to prefer as TV stations.[14] Non-commercial includes both channels of NHK. In general, NHK type is regarded more reality content, and Minkan-hoso (commercial station) is regarded more fantasy content type.[15] Subjects were divided into the next two groups:

N. type ·····n. 61 (22%)

M. type ·····n. 213 (78%)

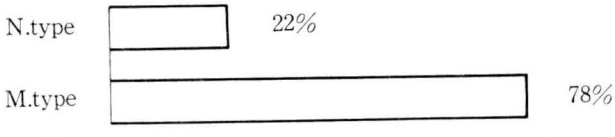


Figure 11. Two types of preference of TV stations

3. Pattern of Program Preference

Subjects marked (o) for the programs they would like to view, and (x) for those they did not care to view. Including the programs they did not put any marks, we put three weights from 1 to 3, and gained the total score of each subject. 26 different kinds of programs were divided into two categories, 1) reality content, and 2) fantasy content.[16] According to the scores of each content, subjects were divided into 1) High, and 2) Low at the closest point of thə median score of each category. Thus, we gained the next four groups of program reference:

H. H. ·····n. 62 (22. 5%)

H. L. ·····n. 61 (22%)

L. H. ·····n. 62 (22. 5%)

L. L. ·····n. 90 (33%)

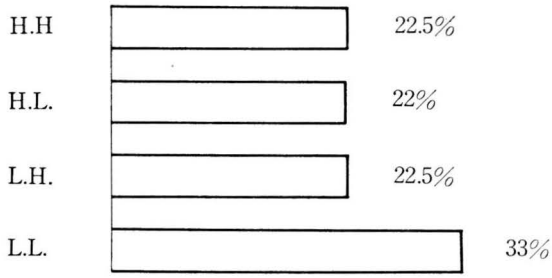


Figure 12. Four groups of prgram preference

4. Aggressive-Hero Type[17]

Out of the 16 fantasy-type programs mentioned in the preceding index, we chose 9 aggressive-hero type programs such as professional wrestling, sumo, Western, detective and mystery stories, etc. The total score of each subject was gained from the lowest of 9 to the highest of 25.

Scores

9 ..... n 26 (9%)

10-12 ..... n. 61 (22%)

13-15 ..... n. 107 (39%)

16-18 ..... n. 49 (18%)

19-21 ..... n. 26 (9%)

22-25 ..... n. 6 (2%)

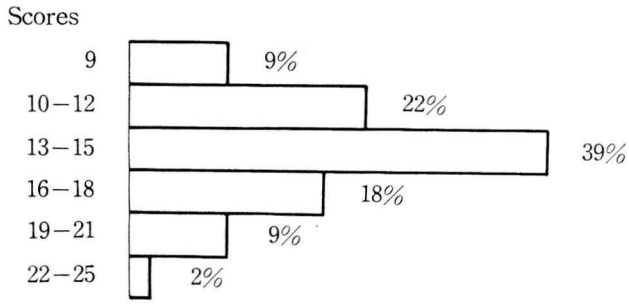


Figure 13. Scores of aggressive-hero type

Other Criteria

1. Self Conflict

What kinds of conflicts do subjects have in themselves? Subjects checked their inner affliction by selecting the strongest one out of five causes. Subjects were divided into the next four groups: 1) physical and mental causes, 2) school achieve-

ment and scholastic troubles, 3) peer conflicts, 4) teachers and class matters, and others.[18]

Causes

No. 1 ..... n. 87 (32%)

No. 2 ..... n. 36 (13%)

No. 3 ..... n. 82 (30%)

No. 4 ..... n. 68 (25%)

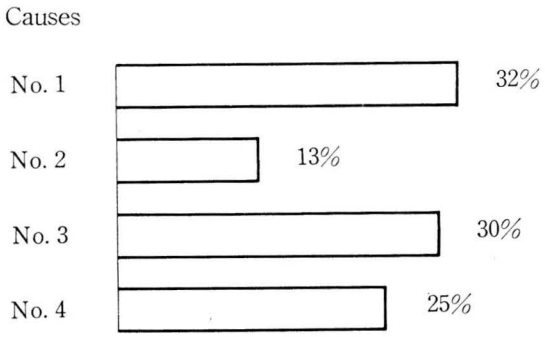


Figure 14. Four groups of self conflict

2. How to Solve Self Conflict

Subjects gave three ordinal numbers out of 14 different ways to solve their inner affliction. Three weights, from 1 to 3 were put for selected items, then, the total score of each subject was gained in two categories: 1) those who choose more of realistic solution such as "to discuss with teacher, peer, senior, or parents.", and 2) those who choose more of fantastic solution such as "to see movies, to take a walk, to compose poems, etc."

Realistic Solution ..... n. 137 (50%)

Fantasy Solution ..... n. 136 (50%)

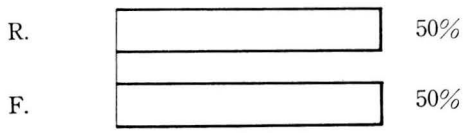


Figure 15. Two groups of conflict solution type

1. An inspection of the result of the research by Schdam.
2. A test of the result of the surveys by Riley and others, done in Japan. Definition of the term is based by Schramm. et al., p. 64, ibid.
3. The whole translation is attached as Appendix.
4. cf., Schrmm, et al., ibid.
5. cf., Table of Occupation by NHK RTCRI
6. We checked as to whether they own color Television but the number was too few to use as data. We also checked the length of TV using, but most of the students answered " more than five years ".
7, " No " answer group gave the reason for having no friends. The top reason was " I am independent in solving personal matters. "
8. Those who have one friend are treated as "non-members" here. cf., M. W. Riley, ibid.
9. cf., M. W. Riley, ibid.
10. F. and P. were divided at the closest point of mediam score.
11. G. P. analysis of this index is attached as Appendix.
12. cf., Schramm, et al., ibid.
13. cf., T. Furu, ibid.
14. cf., Schramm, et al., pp. 137-42, ibid.,
15. This point was checked in order to supplement the index of program preference.
16. cf., Schramm, et al., pp. 63-4, ibid. cf., Maccoby, ibid.
17. cf., Bailyn, L., Mass Media & Children: A Study of Exposure Habits and Cognitive Effects. Psych. Monogr., 1959, 73, pp. 1-48
18. Among others, the top affliction was about opposite sex.

A Study from "THE AMERICAN"

By Henry James[1]

Kumiko Kondo

In dealing with Americans generally, Henry James almost all the cases deliberately abandons the portrayal of local figures: his Americans are nomadic and rootless: they are the composite type. Yet James' characterization of Christopher Newman[2] reveals both elements of the composite type and the national type.

In the beginning scene of the Salon Carre, in the Museum of the Louvre, James declared that no one with an eye for types could have failed to perceive that 'The Gentleman on the Divan' was an American.

> "The gentleman on the divan was a powerful specimen of an American. But he uas not only a fine American: he was in the first place, physically a fine man.
>
> "His unusual attitude and carriage were of rather ralaxed and lounging kind, but when, under a special inspiration, he straightended himself, he looked like a grenadier on parade."
>
> "His physiognomy would have sufficiently indicated that he was a shrewd and capable fellow."
>
> "He had the flat jaw and sinewy neck which are frequent in the American type."
>
> "The discriminating observer we have been supposing might, however, perfectly have measured its expressiveness, and yet have been at a loss to describe it. It had that typical vaguness which is not vacuity, that blankness which is not simplicity, that look of being committed to nothing in particular, of standing in an attitude of general hospitality to the chances of life, of being very much at one's own disposal, so characteristic of many American faces. It was our friend's eye that chiefly told his story: an eye in which innocence and experience were singularly blended.

"Frigid and yet friendly, frank yet cautious, shrewd yet credulous, positive yet skeptical, confident yet shy, extremely intelligent and extremely good-humored, there was something vaguely defiant in its concessions, and something profoundly reassuring in its reserve."

Such are the illustrations of our hero, Newman as a representative of an American given by Henry James at the opening scene. Henly James describes Newman as a successful man in business, an American millionaire--a type of an American. Newman is represented as a commercial man of America, who has made a large fortune in wash-tub, leather and some others. Instead of trying further accumulation of wealth, however, he comes to Europe to improve his mind and to find a wife. He came to the Old world to acquire the knowledge of the so-called refined culture of Europe and also to find a wife—a great grand woman of beauty. The woman of beanty and splendor was his ideal for his wife. It is not difficult to exemplify his failure to achieve culture: his naive and crude taste for the paintings: his generous and childish attitude in trying to purchase the cheap kind of copies of the pictures at ridiculously enormous amount of money. He is a kind of person who admires the copy more than the original. Raphael and Titian and Rubens were a new kind of arithmetic, and they inspired our friend, for the first time in his life, with a vague self-mistrust. Newman's eagerneess to marry a lady of a high rank in the aristocratic society and his determination to marry Claire[3] shows a sort of piece of 'Snobbery' and that does not go along with his essential nature and character.

"I have come to see Europe, to get the best out of it I can. I want to see all the great things, and do what the clever people do."

This was the purpose of the American in Europe.

"I want the biggest kind of entertaiment a man can get. People, places, art, nature, everything! I want to see the tallest mountains, and the bluest lakes and the finest pictures, and the handsomest churches, and the most celebrated men, and the most beautiful women."

"When I say beautiful, I mean beautiful in mind and in manners as well as in person. It is a thing everyman has an equal right to; he may get it if he can. He does not have to be born with certain faculties, on purpose; he needs only to be a man. Then he needs only to use his will, and such wits as he has, and try."

And he concluded, "I would marry a Japanese, if she pleased me." This is the idea of the American.

As intersting contrast with Newman's situation I want to quote some remarks by Valentin,[4] I want to pick up some conversation between Newman and Valentin. Newman and Valentin show quite interesting contrast: for instance, look at their attitude towards 'DUEL'. Newman's opinion—thinking it is completely ridiculous to fight—represents the Americans' concept towards duel and Valentin's idea of Honor problem in duel is a typical idea of Europeans, especially of French aristocrats.

> "What I envy you is your liberty. Your wide range, your freedom to come and go, your not having a lot of people who take themselves awfully seriously, expecting something of you. But I livə beneath the eyes of my admirable mother."

For this, Newman answers as follow: "It is your own fault; what is to hinder your ranging?"

"There is a deligtful simplicity is that remrak! Everything is to hinder me. To begin wnth, I have not a penny." explained Valentin.

"I had not a penny when I began to range," answered Newman. But Valentin answered as follows:

> "Ah, but your poverty was your capital. Being an American, it was impossible you should remain what you were born, and being born poor, it was inevitable that you should become rich. You were in a position that makes one's mouth water; you looked round you and saw a world full of things you had only to step up to and take hold of, When I was twenty, I looked around me and saw a world with everything ticketed Hand off! and the deuce of it was that the ticket seemed meant only for me. I could not go into politics, because I was a Bellegarde. I could not go into literature, because I was a dunce. I could not marry a rich girl, because no Bellegardes had ever married a roturiere, and it was not proper that I should begin."

So Henry James made Newman reflect as follows: "In America lads of twenty-five and thirty have old head and young hearts, or at least young morals; here they have young heads and very aged hearts, morals the most grizzled and wrinkled." James also makes comments as follows: "It must be admmited, rather nakedly that Newman's sole aim in life had been to make money; what he had been placed in the world for was, to his own perception, simply to wrest a fortune, the bigger the better, from defiant opportunity." Isn't this also a general concept of ours towards the Americans? But at the same time you have to remember what Newman confessed to Claire, "I cared for money-making, but I have never cared so very terribly about money." Isn't this also a true phase of the Americans? Though Newman is

shrewd enough to have become a millionaire, he is certainly not a slave of money. His final aim is not the accumulation of coins, but it is how to use of it, how to make the best use of it, so that he can lead a comfortable, pleasant, hadpy life.

Another time James makes Newman, reprsentive of the Americans, declare as follows; "It is the proud consciousness of honest toil manufactured something yourself that somebody has been willing to pay for." Isn't this a remark of a yankee from the democratic country where the spirit of "Give and Take" is shared by everybody and with evereybody, where the people love honest labor and receive their fair reward for their honest toil. Here is the assertive nationalism of the yankee spirit. Here is also the suggestion of a wonderful contrast of the wealth acquired by honest labor with the dark and dirty hereditary wealth of a French aristocratic family, acquired possibly in the sacrifice of the unknown people's blood and tears. Of course Newman is not conscious of this when he is speaking about his fortune-making story-his fortune in comparison with the hereditary wealth.

As to the American inquiry and practical mind, James describes as follows.

"Newman was fond of statistics; he liked to know how things were done; if it gratified him to learn what taxes were paid, what profits were gathered, what commercial habits prevailed, how the battle of life was fought."

It is also interesting to see the difference of the opinions of the two Americans, Newman and Mr. Babcock, the young minister from Boston, concerning the European Culture. The latter mistrusted the European temperament, suffered from the European climate, and hated the European dinner-time; European life seemed to Mr. Babcock unscrupulous and impure. And yet he had an exquisit sense of beauty in the fine arts; and as beauty was often inextricably associated with the above displeasing condition, as he wished, above all, to be just and disppassionate and as he was, furthermore, extremely devoted to "culture", he could not bring himself to decide that Europe was utterly bad.

"Damn his French impudence!" Newman was on the point of saying to himself. "What the dunce is he grimming at?" This was Newman's sentiment when he visited Claire for the first time. He received the impression of "French Impudence" in his conversation with the young aristocrat, though later his mistrust in the manner of the young nobleman expired, and Newman said he wauld be very glad to see the house. Upon Claire's asking how old the house was, the young man, Valentin found the date 1627, over the mantlepiece. Then Newman announced roundly, "Your house

is of very curious style of architecture."

For Valentin's question, "You are interested in architecture?" Newman's answer is worthwhite noting. He said, "Well, I took the frouble this summer to examine-as well as I can calculate—some four hundred and seventy churches. Do you call that interested?"

"Perhaps you're tnterested in theology?" asked his host. Newman considered for a moment, "Not actively." He spoke as if it were a railroad or a mine: and he seemed quickly to feel the apparent lack of nicety.

Henry James reveals his hero as a man whom Madame de Cintre, a representattive French lady of the aristocratic society and as ardent Catholic, could love—that creature "tall, slim, imposing, gentle, half grande dame and half angel; a mixture of 'type' and simplicity of the eagle and the dove. It was Newman's goodness which attracted Claire; but this alone would not have sufficient for the daughter of an old aristocratic family if goodness had not been joined with the essential dignity of Newman.

When madame de Bellegarde first received Newman, knowing his wish to marry her daughter, she sat immovable and asked. "You are an American? I've seen several Americans."

"There are several Americans in Paris," said Newman gaily.

"Oh, really? It was in England I saw these, or somewhere else; not in Paris. I think it must have been in the Pyrenees many years ago. I'm told your ladies are very pretty. One of those ladies was very pretty—with such a wonderful complexion. She presented me with a note of introduction from someone—I forget whom and she sent with it a note of her own. I kept her letter a long time afterwards, it was so strangely impressed. I used to know some of the phrases by heart. But I've forgotten them now—it is so many years ago. Since then I've seen no more Americans I think my daughter-in-law has; she's a great gadabout; she sees everyone." Dosen't this remark of the Marquise suggest something? To her an American was a mere object of curiosity. There is no human sympathy.

Even the gentle madame de Cintre furthered the critical note, perhaps from a mild notion that Newman would be amused. "I've been telling madame de la Rochefidele that you're an American," she said as he came up to her in salon. "It interests her greatly. Her favourite uncle went over with the French troops to help you in your battles in the last century, and she has always wanted greatly to see one of your

people. But she has never succeeded until tonight. You're the first—to her knowledge-- that she has even looked upon."

When the catastrophe came, when the Bellegardes broke their word and Claire was commanded to withdraw from her engagement, Newman was rejected and publicly humiliated only because he was an American, and a commerdial man: they found themselves unable to tolerate that circumstance in relation to their family. Newman should have known that to ask the Old Marquise to parade through her own rooms on his arm the evening of the ball would be almost an affront.

His commercial connection was held against him; and James pointed the irony of the objection. The Bellegardes were shown as sordidly commercial; in shrewdness they far outdistanced Newman. He was beaten, indeed, because he was incapable of suspecting the treachery accumulating againtt him.

At the end Newman was unable to maintain his purpose of revenge against the Bellegardes; he destroyed the scraps of evidence which would have proved their earlier inhuman crime. His act is not overstressed: a deep-lying harshness gave stringency to Newman's generous impulses. But the contrast is frimly and clearly kept.

The novel was in large part a tragedy of manners. "I have the instincts—I have them deeply—if I have not the forms of a high old civilization," Newman once told Claire.

When Newman stood before the wall that forever closed Claire, "the barren stillnes of the place represented somehow his own release from ineffectual desire."—free at last from those dirty, dark aristocratic people by whom he had been cruelly wronged. He reached a movement of profound recongnition not perhaps of inner character of the forces that worked against him-these he could never understand but of his own final plight. The American yearning and longing for the unknown world of the Aristocracy was cruelly crushed. It is beyond something which "Democracy" can do.

This is a novel of the contrast of the civilization of the honest, shrewd, yet naive Americans with certain polished, corrupt and sophiscated specimens of an older civilization. James' purpose of writing "The American" is in his honest and frank contrast of the cultures of the two worlds the cultures of the old world and the new world. James tries to show us the fatal differences of the two worlds the differences of the culture, of the ways of thinking, and living which have come from the

different cultural backgrounds. He tries to show us the clear contrasts of American's fresh innocence, with the helplees convention and cunning maturity of the old world. He tries to contrast the crude, naive honest attitude of Democracy with the cnnning clever, veteran, and magnificient Aristocracy. It is a novel of manners as well as morals. It is a novel both ethical and social. Jame's aim is not only to show us our hero, good fellow, Newman wronged. His aim is not only to show us the sinful secret, inhuman crime which Old Aristocratic family has. His aim is not only to show how evil it is to break the marriage engagement of the two sincere lovers. His aim is not only to show us how fatally hopeless, and helplessly corrupt and dirty those aristocrtic people are, the people in the gorgeous, ancient, magnificient background of Proud European Culture. But also his aim is to show us the Victory of honest, crude, native, innocent Democratic attitude. He wants to show us the delightful, glorious success in the failure of Newman in marriage and revenge. Yes, Newman was a failure in obtaining a wife as well as in improving his mind by the acquisition of so called refined culture, however, he is not completely defeated. He is not an everlasting failure. The novel is a song of Victory of freshness, purity, honesty, sincerity and naiveness of American Demoeratic mind.

Readers may shed tears for Newman as a failure in marriage. They may be sorry for Newman who roams to the Rue d Enfur. It seems James is telling us, "After all it is better for him not to marry Claire. Claire is cold, calm, and hopeless," as Mrs. Tristram commented. Claire was not the person he should choose as his wife. She does not belong to him; she belong to the past, old world." After all Newman the finest American specimen, did not pick up anything worthwhile from the old world, as he himself confessed, "that he had brought home no new ideas from Europe," and his conduct probably struck them as eloquent proof of failing invention. Yet we cannot call Newman a failure. The decaying, cunning old mind of the Old Aristocratic World, after all, could not defeat the young, fresh honest Newman, fresh, rising mind of the Democratic World. According to Henly James, Newman is not defeated at all: the American is not defeated at all.

(1) HENRY JAMES (1843--1916)
(2) Christopher Newman: An American who came to Europe to get a wife.
(3) Madam de Cintre (Claire): French Aristocrat, young beautiful lady, Valentin's sister-in-law, and daughter-in-law of Madam de Bellegarde.
(4) Count Valentin: Claire's brother-in-law, Valentin de Bellegarde
(5) Madam de Bellegarde: HaughtyFrench Aristocrat, wife of Marquis de Bellegardes, Claire's mother-in-law.

執筆者紹介（目次順）

岩本経丸	学監 教授	倫理学 ドイツ語
神辺靖光	助教授	教育学 教育史
庄司寿完	助教授	社会心理学 マス・コミュニケーション
井口美登利	講師	タイプライティング セクレタリアス
田島富美江	講師	英文法
田所南美子	講師	英語音声学 オーラル・イングリッシュ
カズコ・ムーア	講師	英会話
近藤久美子	助教授	英米文講読 外国語教育法

論叢（第二巻）

昭和四十三年十二月二十五日印刷
昭和四十三年十二月二十九日発行

発行者 東京立正女子短期大学
東京都杉並区堀之内二―四一―一五
電話（三一三）五一〇一～三番

印刷所 新英印刷株式会社
文京区小石川五の三の七

Tokyo Rissho Junior College for Women

Ronso

Contents

Preface — Tsunemaru Iwamoto

Problems in Women's Education Viewed through Educational Statistics
—With Reference to Choice of Vocations and College Majors—
Yasumitsu Kanbe

Culture Programs after World War II — Jukan Shoji

A Study in Teaching Typewriting (1)
—History of the Typewriter and Problems in the Universal Keyboard—
Midori Iguchi

Some Problems in Pattern Practice — Fumie Tajima

Concerning Teaching English Pronunciation at School — Namiko Tadokoro

A Study on TV Viewing Pattern and Social Relationship — Kazuko Moore

A Study from "The American" by Henry James — Kumiko Kondo

1968